

【資料紹介】

長谷寺所蔵 岡倉天心書簡（丸山貫長宛）ほか

天心書簡研究会編

刊行に寄せて

山口 静 一

本資料の発表に当たり、先ずは所蔵する新義真言宗豊山派総本山長谷寺の格別のご好意に心から感謝申し上げたい。これによって従来判然としなかった岡倉天心の対仏教、対宗教に関する研究に新生面をひらき、かつは明治仏教史の一面、とりわけ忘れられた真言僧丸山貫長の位置とその事績を明らかにする研究の一助となることが期待されるからである。



最晩年の丸山貫長

東京美術学校校長時代の天心が丸山貫長を師父と仰いだことは、『父天心』の「中根岸時代」に言及された挿話と、平凡社『岡倉天心全集』第六巻収載の三篇の貫長宛書簡によってわずかに知られ得たのみであった。

天心はすでに明治十八年八月、さきに三井寺（天台宗）法明院阿闍梨桜井敬徳を向島小梅の別邸に迎えて受戒し話題を呼んだ元老院議員町田久成に倣って敬徳に教えを受け、同年九月十五日、菩薩十善戒牒を授与されている。ちなみにこの機会に敬徳を拝し受戒した名士のかなには副島種臣、河瀬秀治、フェノロサ、ビゲロウなどが数えられる。翌十九年五月、天心は更に法明院に赴いて敬徳より円頓一乘五戒を受け「雪信」の戒号を与えられた。フェノロサと共に欧米に出張する数カ月前のことであった。「諦信」の法号を与えられたフェノロサ、「月心」ことビゲロウと共に、精進潔斎の日々を過ごしたことが記録されている。^①

しかしこの時点で天心と仏教との関わりに就いての情報はプツリと中断していた。その後一九六八年（昭和四十三年）五月、奈良の『大和タイムス』紙がシリーズ「大和百年の歩み」のなかで「丸山貫長」を掲載。筆者故小島貞三氏（奈良文化女子短大教授）は貫長の経歴業績を紹介したが、最後に天心との親交について数行触れたのみだった。貫長終焉の地となる宇陀の大蔵寺に天心が「弁事堂」を寄進したことで結ばれている。

同年（昭和四十三年）七月、堀至徳の日記を含む遺品類が天理市丹波市町の生家で公表されて以来、貫長と至徳の事績、天心との関わり

が漸く鮮明になった。インド学者故春日井真也博士はこれらの資料を整理し、三者の役割とその意義を追求した一連の研究論文を『インド近景と遠景』^③にまとめられている。

以上の経緯で、天心・貫長関係文献は研究者の間で長らく探し求められていた資料だった。貫長宛天心書簡が長谷寺に所蔵されていることは、実は平凡社『岡倉天心全集』（一九八〇年発行）の編集段階から仄聞されていたが、当時は「整理中」ということで資料を提供していただくことができなかった。

その概略を初めて公表したのは、一九九二年（平成四年）四月二十二日発行『内外日報』^④だった。記者は同紙京都総本社の大井美保氏。氏は「岡倉天心と丸山貫長」「仏教復興に燃えた師弟の交流」「長谷寺で書簡発見」の見出しのもと書簡の紹介と解説を三面にわたって記述。貫長の仏教活動が僧俗を超えた「不二真教」の立教と「真言実行会」の組織であったこと、これに天心が共感して師事し、支援を惜しまなかったこと、更に貫長の遺族に取材してその晩年の様子を初めて伝えた貴重な記事である。同紙が仏教界の専門新聞であったため、天心研究者の目に触れる機会が少なかったようだ。

貫長は来信のほか日記、系図、法具、印綬、自作の仏像仏画、また住職だった室生寺の歴史資料や真言実行会の雑誌など遺品を弟子の木村栄真に託した。その一部がのちに貫長の息子山本兩宝師（飛鳥寺前住職）に預けられた。現在長谷寺が所蔵する二八三七点にのぼる貫長遺品は、兩宝師が「何とか活かす方法はないかと考え、長谷寺にお納めすることにした」のだという。これも『内外日報』の教えるところ

である。

この記事の出る一年前（一九九一年十一月）、長谷寺では貫長遺品のマイクロフィルム化が完成したようである。（おそらくそれが契機で『内外日報』の記事が書かれたものと推察される。）

以来二十年、ここに漸く天心書簡、岡倉もと子・九鬼初子書信その他計六十五通のマイクロフィルムによる複写を長谷寺より借用し、長谷寺所蔵岡倉天心関係資料の全貌を明らかにすることができた。斡旋の労をとられた長谷寺第八十五世化主小野塚幾澄下と関係者に、改めて謝意を表したい。

聞くところによれば、長谷寺では依然として天心資料は「整理中」で門外不出の由。本稿が先ずは長谷寺作業の一助となり、かつは天心研究、貫長研究、また明治仏教研究に些かなりとも寄与できれば、編者としてこれに過ぎる喜びはない。

校訂に当たっては、天心特有の崩し字解読を主として堀忠良（堀至徳の甥、至徳・貫長の研究者）と吉田千鶴子（東京芸術大学美術学部非常勤講師、平凡社『岡倉天心全集』編集協力者）が担当。池田久代（皇学館大学文学部教授、天心・貫長・至徳の研究者）、鍵岡正謹（岡山県立美術館館長、『岡倉天心全集』編集主幹）、山口静一（埼玉大学名誉教授、『岡倉天心全集』編集協力者）がこれを助けた。また、年次不明の書簡数編は内容と書体により大部分（詩篇一通を除く）を確定することができた。なお、編者による小論文と「貫長・天心 対照略年譜」を加えた。

二〇一一年三月

- (1) 『万報一覽』No.83 (明治十八年十月)、No.87 (同年十一月)、No.118 (明治十九年十月)
- (2) 『大和タイムス』昭和四十三年五月二十五・二十六日刊。「大和百年の歩み」Nos.530-531 (連載二回) 堀忠良提供。後に単行本『大和百年の歩み 文化編』(昭和四十六年大和タイムス社)に収録されている。
- (3) 春日井真也『インド 近景と遠景』昭和五十六年 同朋舎
- (4) 小野塚幾澄提供

長谷寺所蔵 岡倉天心書簡（丸山貫長宛）ほか

岡倉天心書簡

明治二十二（一八八九）年

天心書簡研究会編

目次

刊行に寄せて……………	山口 静一……………	1	5
岡倉天心書簡……………	……………	6	26
岡倉もと子書簡……………	……………	26	29
九鬼はつ子書簡ほか……………	……………	29	30
その他……………	……………	30	30
書簡解題・注……………	……………	31	42
丸山貫長・岡倉天心 対照略年譜……………	堀 忠良・山口静一共編……………	43	50
埋もれた傑僧、丸山貫長——真言実行院の足跡をたどる——……………	池田 久代……………	51	55
岡倉天心 漢詩訳注及び解説……………	鍵岡 正謹……………	56	62
天心と貫長の出会いについて……………	吉田千鶴子……………	63	67

1 明治二十二年（年次推定）五月二十八日 丸山貫長宛 封筒なし

拜別以来殆ント一年 御不沙汰罷在 重ねて緑葉杜鵑の天と相成候
 税所子爵*1より御様子承り候へば 此頃九面菩薩*2の御彫刻に従事被遊候
 趣 御羨申上候 当地別に異常無之 本来の事業*3は益ス開達候様相見
 へ候 御都合により御上京相成て如何 名山高臥の情は面白き事にて
 候へ共 京華の風塵モ亦其楽なきに非ス 技芸天女の曼荼羅*4は古来鳳
 輦*4の下智覚の中心ニ在て成就スルモノニ可有之と愚考仕候 其高按如
 何にや 猶近来の御模様御漏らし被下度 時下御自愛ヲ侍り候

草々頓首

五月廿八日

覚三 再拝

貫長阿闍梨耶 金蓮座下

昨夜悪詩ヲ得候間 高覧ニ供し候 御笑評被下度

浮生如梦半疑真 歌哭交身転法輪

落月残花詩実相 行雲流水画精神

万緑磨尽仙猶鬼 衆劫消来仏亦人

休向混沌談道德 天魔龍象本同倫

天心子 未定

2 六月十八日 (消印) 丸山貫長宛 封書 (二通同封)

〔表〕 音羽護国寺ニテ 室生寺住職 丸山貫長殿 親展

〔裏〕 岡倉覚三 (印) 東京美術学校用 (封印) 固

拜啓 内務の御模様^{*1}如何にや承り度 且は当地御滞在の場所等御相談
仕度 御寸暇も被為在候ハ、拙宅^{*2}へ御光臨ヲ希望仕候 小石川の方少
しく都合悪敷 他に相求候方可然存候 就而ハ上野護国院^{*3}事御問合相
成可然歟 為念申上候

六月十八日 貫三
貫長和上 座右

無恙御帰山相成候や 別後乾坤殊に無情ニ覚へ候 県庁の運び如何と
掛念仕候 御様子御報被下度 領収書并ニ書類御廻し申上候
〔七月^{*4}〕 十七日 天心子
丸山和上座下

〔同封受領証〕 明教新誌代価収受之証

老田六拾八銭
二十三年一月ヨリ六月分代
明治二十三年七月十六日 明教新誌本局
室生寺御中

和州

〔同封名刺〕 稻生真履^{*6} 東京赤坂区赤坂表町四丁目八番地



図1 明教新誌受領証
20.0 × 15.5cm

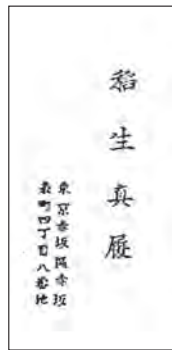


図2 稻生真履名刺

3 明治二十二年 (年次推定) 六月二十七日 丸山貫長宛 封筒なし

飄然雲ヲ踏ミ錫ヲ飛して御帰院の趣 是亦愉快の事ニ御座候 人天龍
象ニ住して物表物裏の一物ヲ尋ね候折柄 幸に高師ニ接し法爾^{*8}の真相
ヲ話候事ハ縁外の奇縁ニて 近頃面白き心地致候 何れ時ヲ得て再ヒ
勝会ヲ期シ度存候 小生貧困ニて和上の巡閱ヲ成就スルニ足ラス 是
亦可笑的の事ナリ 他日好機ヲ得テ一灯残雨の談柄ニ供スヘク候
先ハ御帰リヲ送り申上候

六月廿七日

草々頓首

覚三

貫長僧都 金蓮座下

明治二十四(一八九二)年

4 明治二十四年(年次推定)^{*1} 一月一日 丸山貫長宛 封書

〔表〕 西の京薬師寺にて 丸山貫長殿 親展

〔裏〕 奈良角谷にて 岡倉覚三〔封印〕×

一昨日は甚タ失礼仕候 陳レハ破戒的の会合ニ候へ共 今二日当地城戸町松利ニ於て一夕歓話ヲ尽し度 何卒五時頃より御鷹臨ヲ願候 右畢りて拙者宿所へ御一宿相成候て宜敷

一月一日

覚三

室生寺 丸山貫長殿

5 七月十日(消印) 丸山貫長宛 封書

〔表〕 大和国室生山室生寺ニ於て 丸山貫長殿 親展

〔付箋〕 竜田郵便局 宇陀郡室生村行

〔裏〕 東京根岸金杉村六十一番 岡倉覚三 七月十日

〔封印〕 固

拜啓 別紙象王の図 誤て手本ニ残り候ニ付 御届申上候 昨夜闇中搜索之際 是亦不正見得と自ツカラ警醒仕候 道中御自愛被下度 草々頓首

七月十日 丸山和上 座下

覚三

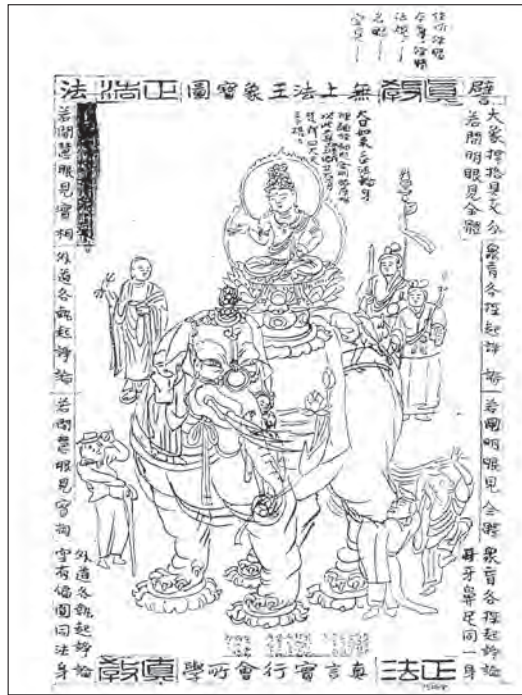


図3 同封の真言実行会「正法 真教 無上法王象宝図」25.6 × 19.2cm

6 七月二十一日(消印) 丸山貫長宛 封書

〔表〕 大和国室生山室生寺 丸山貫長殿 親展

〔裏〕 岡倉覚三〔印〕 東京美術学校用〔封印〕 固

無異帰山相成候趣 慶賀之至ニ存候 小生事務多端ニて此夏は都門ヲ出ツルの目途無之 遺憾此事ニ候 何れ好機ヲ得て和上と共々靈山の宝窟を探り度 猶時々御様子御漏らし被下度願候 草々頓首 七月廿一日 貫長和上 座下

覚三

7 八月十五日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺ニ於て 丸山貫長殿 拝
復親展

【裏】東京中根岸町四番地 岡倉覚三 (印) 東京美術学校
用 (封印) 固

拜啓 去ル八日の御書披見仕候 御帰山後中暑相成候趣 今年殊の外
烈しき熱氣 何分厚く御加養相成度願候 来月三日より天供ニ御かゝ
り被下候由 有難く存候 当方ニても祈念可仕 何卒宜敷相願候 而
し御病後ニモ有之 強て起業相成 御身体ニ障り候様ニては心苦しく
御全快の上ニテ差支なき事と考へ候 此辺御見計被下度候 品川子
爵^{*2}より一山保存^{*3}の事申出られ候由 喜ハしく 其儀ニ付御用被為在
候ハ、御命し被下度 草々頓首 覚三

丸山和上 坐下

8 九月一日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【面】奈良県下大和国室生山室生寺住職 丸山貫長殿 親
展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 固

拜啓 明後三日より天供御起業相成候趣 御煩勞之段万謝之至ニ存候

当方にて可成祈念不怠致度存候 先以て右御礼迄 草々頓首

九月一日

覚三

貫長阿闍梨耶 座下

追伸 九鬼君^{*}へ御書面の趣 同君より話有之 最初同君より御蔵
幅御廻し相願候主意は右にて幾分カハ一山へ寄附の名義モ相立ち
幾百円にて聊カ諸堂修繕費の内へ補フへき積リニ有之 毫も宝物ヲ

和上の御手ニよりて蒐集スルの意無之 此辺は万々御諒察被下度趣
申居られ候 登山の事 此際は六ヶ敷との事なり 序ながら右話の
儘

9 十一月十一日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展拝復
【裏】東京美術学校にて 岡倉覚三 (封印) 固

肅啓 華墨拝誦 天供御結願の趣 御精行之程不堪遥察候 右御礼申
述度 被仰越日課三経開板の儀 目下問合中 取調之上御返辞可申上
候 先は右得貴意度 草々頓首 覚三

丸山阿闍梨耶 坐下

御懇示ヲ蒙り候井上宣文^{*}はもと美術学校の生徒 中途ニて退学致
候者 技術余り出来不申 彼是申候も別ニ差支なく候

10 十二月五日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展

【裏】東京美術学校にて 岡倉覚三 (印) 東京美術学校用

(封印) ×

【裏】 東京中根岸四番地 岡倉覚三〔封印〕

拝啓 陳レは先頃被仰越日課三經上刻費用の儀問合セ候処 彫刻料通
常五円 上等にて十円程ニ可相成 此上更ニ手ヲ加ヘ精巧ヲ極め候
ハ、猶少しく上ルヘク存候 右板下は如何にや 御認め御廻し相成ヘ
き御都合ニ候や 右費用中之レハ含有セス候 先は右不取敢得貴意度
十二月五日 覚三

恭賀新年

明治廿五年一月二日 岡倉覚三

丸山阿闍梨 座下

昨年種々御好意拝謝致度 併せて時下御自愛奉願候

丸山阿闍梨耶 座右

13 三月十六日(消印) 丸山貫長宛 封書

11 十二月九日(消印) 丸山貫長宛 封書

【表】 奈良県下大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長様親

展

【裏】 東京中根岸四番地 岡倉覚三〔封印〕 固

親展

拝啓 陳れは御供物等去ル六日無滞着京仕候 右不取敢御請迄

草々頓首

又々ト相成候は当分ハ此後ニ機会も無之と存候ニ付 何卒此際ニ深

秘ヲ探り度ト存候

弟子覚三

内陳

丸山阿闍梨耶 座下

山院御模様 如何ニ被為在候や 雲深く雪多き事と奉察仕候 何卒

御自愛專一ニ存候

明治二十五(一八九二)年

12 一月二日(消印) 丸山貫長宛 封書

【表】 奈良県大和国宇陀郡室生山寺にて 丸山貫長殿

容ヲ拝し 高話ニ接し度存候 先は右内々得貴意度

尊

拝啓 其後は意外御疎闊打過候処 益御勇儘の事ト奉察候 陳レハ小
生事今般京都奈良へ出張被命 明十七日夜出發 京都ニ廿一日迄奈
良ニ廿三日迄参り居候都合ニ付 此際久し振りに御山ニ登り度 何卒
廿三四日頃ニハ御在院の事希望ニ耐ヘス候 来ル廿六日ニハ是非共御
地出發帰京可致ニ付 一兩日間にて諸事調ヒ候ハ、兼而の宿願ナル
龍穴ニ入り度 幸ニ御同意ニ候ハ、夫レ迄ニ御準備相成度 御模様奈
良角谷方迄御一報願候 龍穴の儀 六ヶ敷候トモ 一応登山仕り 尊

三月十六日夕
草々頓首
貫長阿闍梨耶 座下
龍穴の事可成公然ナラサル方可然存候
寛三拜

【表】奈良県宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長様 親展
【裏】東京美術学校にて 岡倉寛三〔印〕東京美術学校用
〔封印〕固

14 明治二十五年(年次推定)三月二十八日 封筒なし

【書状裏】本書新堂植田松三八遣ス

肅啓 此度は突然登山御邪魔致候 来年の事業日本の為メ関要ニ付
何卒深く御祈念被下度 今日当地より汽船にて出発帰京ニ際し 右御
礼旁申述度 栄真法堅の両士へ可然御伝声願上候 御山は世外的情ニ
て御羨しく存候 他日再来ヲ期す 草々頓首
三月廿八日
寛三
貫長和上 座下
悪詩一ツ 御叱正ヲ仰き候
入如意山龍窟求宝不為有感

謹啓 両度の御信り有難く奉存候 佳作御示し被下 感吟仕候 彼是
取紛れ御返辞怠り居 恐縮ニ耐ヘス 近頃山中御模様如何に候や 秘
宝は好機ヲ以てよりく御探り相成候事と喜ひ居候 来年米国ノ大会
并ニ本年六月独逸国ニモ美術大会有之 急ニ出品杯の都合にて繁忙ヲ
極め候 両方共御祈念ヲ煩ハシ度候 栄真法堅両師へ宜敷御伝言被下
度 優婆夷の事 心ニかゝり候へ共 唯断行〔断ハリ?〕の外ナシと
存候 小牧知事此頃上京中にて先夜も此辺の話杯致し大笑仕候
目下此地の氣候花落ち新緑の天ニ相成候 御山如何ニや 法の為メ特
ニ御自重相成度願候
四月廿六日
寛三拜
堅海阿闍梨耶 金蓮座下

春雷一夜蟄龍驚 誰放魔王入法城

万岫無心雲倒落 九天自在月空生

大塊小鬼酒辺影 白骨青山苔下名

欲碎靈珠為粉末 煩惱百八未分明

混沌子

丸山和上

寛三

15 四月二十七日(消印) 丸山貫長宛 封書

拝啓 其後御模様如何被為在候や 御自愛專ニ奉存〔願カ〕候 陳
レハ或方より承り候へハ 御藏幅釈迦三尊像(宝物鑑査状四四一五号)
売品ニ出テ候趣 意外ニ被存候 右は御承知ニ候事ニや 昨年九鬼君

16 五月十日(消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺にて 丸山貫長殿 親展

【裏】東京美術学校にて 岡倉寛三〔印〕東京美術学校用

〔封印〕固

方に申遣され候事由ニ照して何分了解仕兼候ニ付 為念御問合申上候
姦兒の手ニ出て御迷惑の筋ナレハ 当方にて何とカ取留候様可致不
取敢右得貴意候

五月十日

覚三

貫長阿闍梨耶 座下

番外・参考 明治二十五年六月七日 (消印) 丸山貫長宛 封書 (岡

倉天心全集 第六卷所収)

【表】奈良県下大和国宇陀郡室生山 室生寺住職 丸山貫

長殿 親展

【裏】東京美術学校にて 岡倉覚三 (封印) 固

肅啓 過般来御念書の趣承知仕居彼是工夫中に御座候 目下の処にて
は氣運未た到らず 九鬼君へ申出候も見合セ候方可然存候 愚意ノミ
ヲ以テスレハ御出京の事至極適當ニ被考精々其準備ニ取懸られ候て宜
敷カルヘシ 唯御山の事全く打捨相成候も遺憾ニ有之 御出山の模様
篤と御勘考願度候 又東京ニ於ても初メハ供養の弟子乏カルベシ 小
生モ此頃は福分委 (菱) 縮して大ニ和尚の為メニ尽し能ハサルヲ憾む
のみ 去れば今少しく御待合せ相成 他日小生の都合相付き盛に御迎
へ致候迄御在院相成ては如何にや 別に御見込有之候儀ニ候ハ、御
差示被下度 烏兔忽々心中百事畢ニ成ラズ 醉中夢裏に白髪ヲ長スル
は実に嘆しく候へ共 或ハ神機一変手ヲ握て大笑スル事モ可有之か
尚々御加養專一二存候 時ニ御様子御漏し被下度

六月七日

覚三生

貫長阿闍梨耶 座右

番外・参考 明治二十五年九月十日 (消印) 丸山貫長宛 封書 (岡

倉天心全集 第六卷所収)

【表】奈良県大和国宇陀郡室生山 室生寺^(主) 丸山貫長殿

親展

【裏】東京中根岸四 岡倉覚三 (封印) 固

久しく打断へ罷在候 近頃如何被為在候や 都下にては今に炎熱ニ苦
しみ候 山房の清爽遙ニ御羨み申上候 御本尊御刻成ニ候哉 其内御
携帶東上相成て如何 小生事例の通りにて未た十分用意して御迎へ致
すへき運ニ至ラズ 唯々時機相待候ノミ 碌々の生涯御一笑被下度
而し其内何とか工夫可相付と存候 靈山の秘宝其後御探検相成候哉
出現の時ハ正法興隆の時ナルヘク 和上も小子も得意の天ナルヘシと
存候 目下世上の風雲雷霆の擊磨スル是果して何の象か 御祈念相願
候 草々敬白

九月十日

覚三

貫長阿闍梨耶 座下

17 十月十日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県奈良西ノ京薬師寺にて 室生山住職 丸山貫

長殿 親展拝復

【裏】東京美術学校にて 岡倉覚三 (印) 東京美術学校用

(線で抹消) (封印) 固

真教興隆の御大願 固より小生の希望スル所ニ有之 精々協賛の力ヲ

致度存候 三十七人結集^{*}の儀 強而六ヶ敷事ニモ有之間敷 其器ヲ見

テ誘引候様可致 中ニは工巧の妙手アリテ造像の功德ニ参スルヲ得ル
者アランか 道場諸尊建立の拳は本願第一の義ニシテ最も必要ナレト
モ 是ハ随分資力ヲ要し候ト存候 小生幾分ニても余裕御座候様ナレ
ハ 万事ヲ擲ち喜ンて之ニ尽スヘキも 目下の処如何ニモ困り居候

来月中頃ニ至り候ハ、或ハ都合も付き候ハんと存候へ共 未タ必し難
し 此事は篤と拝顔之上 高慮も承り度候ニ付 御都合相付候ハ、一
応東京へ御来遊相成度存候 如何 現在御彫刻の本尊落成ノ上ハ一先
東京ニ御駐錫相成候も可然歟と考へ候 結縁慈濟の方便ハ勿論 諸願

の上ニ就而は機縁可有之と考へ候 猶御熟考被下度 御滞在の事位は
小生方ニて何とか可致候 小生も引続き祈念不怠 感応も相見へ候様
ニて喜ひ居候 尚此上とも御教示御祈念被下度願候 真教興隆の事は

飽くまでも貫徹致度所存ニ御座候
十月十日 寛三

貫長阿闍梨耶 座下

呉々も御身体御養護相成度希願致候

18 十月二十五日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県奈良西之京薬師寺ニ於テ 室生寺住職 丸山

貫長殿 親展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封) 殿

必親展

殿

薬師寺へ差上タル書面御披見被下候や 其後静観スルニ 真教の妙門
自然ニ洞開スルモノ、如し 諸法一モなくニもなし 第三義ハ則チ最

勝義ニシテ 心眼の中 世間出世間¹の差別相對ハ消滅セントス 後世
仏道の衰頹アルハ出世間法ニ偏着シテ三¹。一²。妙³の理ニ遠カリタルニ
因ルナカラシヤ 輪王³ハ即法王⁴ナリ 法王ハ即輪王⁵ナリ 事理ニ相⁵

眞実ハ中和⁶ノ本体ヲ離レテ識得スヘカラス 真教ハ蓋し諸教法ノ従来
偏欵スル所ヲ正し 円満具足セシムルニ外ナラサルヘし 是レ余カ邪
見カ將タ正見カ 正見ナレハ皆和上の賜なり 茲ニ大願ヲ発して謹テ
和上ニ随テ無上ノ果ヲ証得セント欲ス 和上今年五拾歳ト雖トモ未タ

老ヒタリトナスヘカラス 寛三今月三十歳 請フ 将来二十一年ヲ期
シテ此願ヲ成就セン 初ノ七年ハ其種ヲ植ユヘク 中ノ七年其花ヲ見
ルヘク 終ノ七年ハ其〔種の欠か〕子ノ枝ニ満チテ後世蕃殖の因トナ

ルヲ知ラン 若し不幸短命ナラハ 来生成道ヲ希フノミ 此念若悪念
ナラハ和上ノ垂示ヲ仰き候 若し善念ナラハ和上ノ加持力ヲ仰き候⁷
行道⁸の法果シテ如何 長夜茫茫唯々阿闍梨一灯の光ヲ待ツ

廿五年十月廿四日 灯下 弟子覚三

貫長阿闍梨耶 座下

呉々も御からだ御大切ニ被為遊度候

19 十月三十一日 丸山貫長宛 はがき

【表】明治二十五年十月三十一日 (消印)

奈良県大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿

廿八日附の貴書正二落掌拝読仕候 右不取得貴意度

東京にて 十月三十一日 岡倉覚三

20 十一月二日 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親

展

【裏】東京下谷中根岸四番地 岡倉覚三 殿 【封印】殿

葉書ヲ以て申上候通 廿八日附の尊翰正ニ拝披 懇に御開示の趣 深く奉謝候 真教の門ニ入り候上は着々成就の道ニ上り度 静思ヲ凝し居候 三道場¹建立の事ハ根本の業トシテ最モ関要ニ可有之 室生山ヲ中和三一ノ密蔵場²トシ 京都ヲ金剛法城トスル高按至極宜敷存候 慈濟道場ハ滿天下尽く是ナルヘシト雖トモ 東京ヲ主トスル方好方便と存候 愚考ニハ室生山天堂建立の後ハ先ツ慈濟他仕の業ニ着手セラレ 暫く東京ニ参られ候方可然存候 理智ノ道場ハ今日の場合必しも急ぐべきニ非サルカ 高慮如何にや 何れにしても室生山ニ於ケル衆藝精究場ハ第一着トシテ建立相成度 現今御敬刻の十一面尊并ニ歡喜天（木型）ハ和上の御手刻ヲ煩ハシ 大日尊、軍荼利明王及準胝仏母及脇侍ハ天下ノ名工ニ依頼して成功ヲ期し候様致度 就テハ現在御彫刻の尊成功相成候て一先御出京被下度 其節篤と尊慮承り 何トカ工夫可仕候 慈濟結縁の門³ニ就テハ聊カ愚考スル所有之 拝晤の上申述度存候 御見込如何にや 不取得貴意候 草々敬白

廿五年十一月二日

覚三拜

貫長阿闍梨耶 座下

21 十一月十六日（消印） 丸山貫長宛 封書 他三点同封

【表】奈良県下大和国宇陀郡室生山室生寺住職 丸山貫長

殿 書留親展

【付箋】大和国山柏局廻し

【裏】東京下谷区中根岸四番地 岡倉覚三

此御書昨午午後四時頃落掌致候

十一月十一日発の書留ヲ以て詳細御垂示ヲ蒙り 真教興隆御本願の次第も顕明致し感佩之至ニ存候 小生ニ於テ更ニ難問スヘキ廉無之 微小の点は拝姿之上ニ譲り度候 唯々興隆の順序手段ニ就き考按スルニ 第一ニハ一山ニ自性ノ道場ヲ建立シ 三十七位の在家菩薩¹ヲ結集して根本ノ法城トナスハ固ヨリ急務ニシテ 最初ノ着手トシテ直チニ其成就ヲ希図致し 三箇年間ニて結了相成度見込ニ御座候へ共 第二ノ着手、加持門ニ至テハ聊カ愚考有之候 素より既ニ自性道場ヲ建立候上ハ三一即妙ノ本地成定候モノニテ 加持ノ位ニ於テ本来理ト事ヲ分タス候へ共 施行方便トシテハ自ツカラ之レヲ理事ノ二相ニ区チ 二相ノ成就合体ヲ以テ加持門ノ具足トスル適當ナルヘシ 真教弘通ノ方法タル 一ニハ出世間ニ即シテ（理）之ヲ説クヘキなり 金剛法城建立ノ如きはなり 二ニハ世間ニ即シテ（事）之ヲ成スヘキなり 此点拝晤の時申述度 両様和合シテ始メテ弘通の真ヲ得ルナルナカラシヤ而シテ金剛法城ハ先ツ之レヲ人の心中ニ建立スルヲ適當トス 心中樓閣現前スレハ世間ノ樓閣ハ一夜ニシテ成ルヘキノミ 理ノ加持ハ是

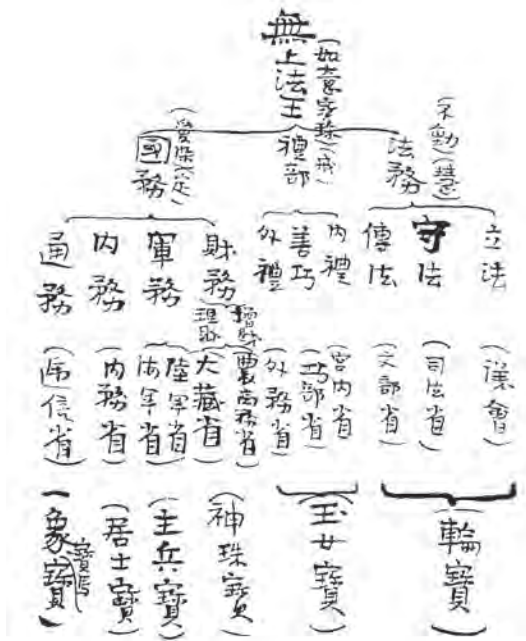


図4 文中の「無上法王曼荼羅」図
巻紙 縦 18.0cm

レ和上ノ修力ニ依ル外ナシ 事ノ加持ニ至テハ 請フ 教ヲ承ケテ之
レニ從ハン 大阿闍梨耶ノ卓見如何 西京ヲ金剛法城トシ 諸法の中
心トスルハ前ニモ申上候通小生の最も同意スル所ニ御座候へ共 國務
法務相離レテ而(して) 二ノ體ニ歸スルノ嫌ナキカ、愚考ニハ国王即
法王トスレハ二者同一ノ地ニ在ラサルヘカラス 地相ノ上ヨリ之ヲ見
レハ西京の方東京ニ勝リタルヘシ 唯タ法城ト王城ノ離ル、ヲ好マス
此辺拜顔の節高示ヲ蒙リ度候 愚昧の見ナレドモ試ミニ国王即法王
ノ義ニ依リ無上法王曼荼羅ヲ画ケハ則チ左ノ如きものナランカ(各省
ノ如キハ仮リニ配当シタルナリ 無上國ノ省ハ現在ノモノトハ異ナル
ヘキなり)

法務國務共ニ一法王ノ調和ニ任スルモノナレハ 法城国城ノ分離スル
ハ不可然 万一分離スルノ必要アレハ 無上法王ハ則チ金剛法城ニ住
セサルヘカラス 高見如何 御序ニ御示し願上候 三十七位結集の事
委細承知罷在 兩三四五心当のものを御座候 何れニても天堂建立ハ
忽諸ニ付スヘカラス 目下の御刻落成候て拜顔之上他の諸尊造立ヲ計
画致度候 和上今年五十年ナレドモ将来二十一年ノ後猶七十二年ニ過
キス 自愛養護相成候ハ、八十九八人間の寿ヲ得ラル、コト難カラ
サルヘシ 精々身體御加護相成 緩々大法の大成ヲ御待相成度願候
向フ三年ニテハ一山の自性道場建立ヲ終ラハ先ツ一ノ成就なり 次ノ
七年間ハ金剛法城を立ツルノ期トナシテ可然カ 小生ハ一面より世事
ニ即シテ真教ノ弘通ヲ図ルヘク 二七年ノ際ニ在テハ理事和合ノ期至
ランコトヲ望ミ候ノミ 高慮達觀果して此の如クナラハ尚御意見御示
し願上候 若し別ニ御考被為在候(ハ、)御教示相成度 不取敢拝答
乱筆御免被下度 草々敬白

明治二十五年十一月十六日

寛三

貫長阿闍梨耶 座下

過日小生の為メニモ御祈念被下候趣 感謝之至ニ御座候

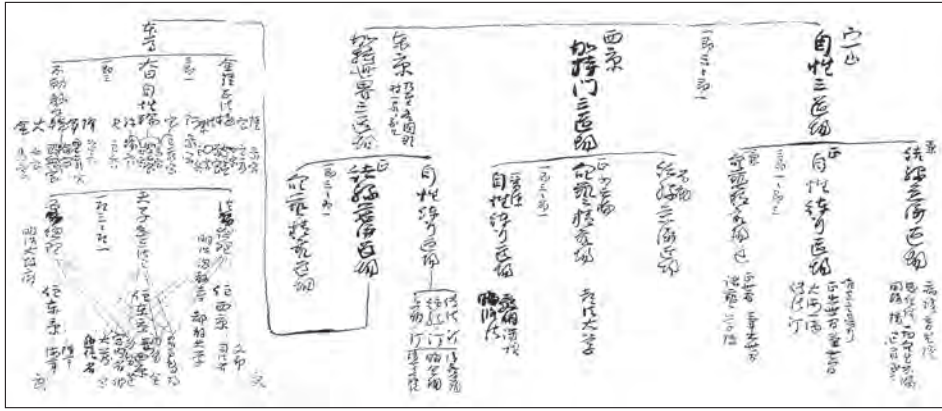


図5 同封の丸山貫長筆 真教道場構成図 巻紙片 縦 18.0cm

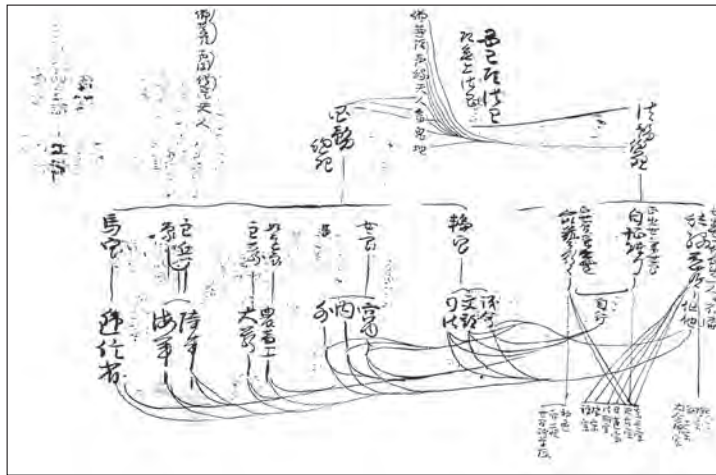


図6 同上 用箋 24.7×37.6cm 表

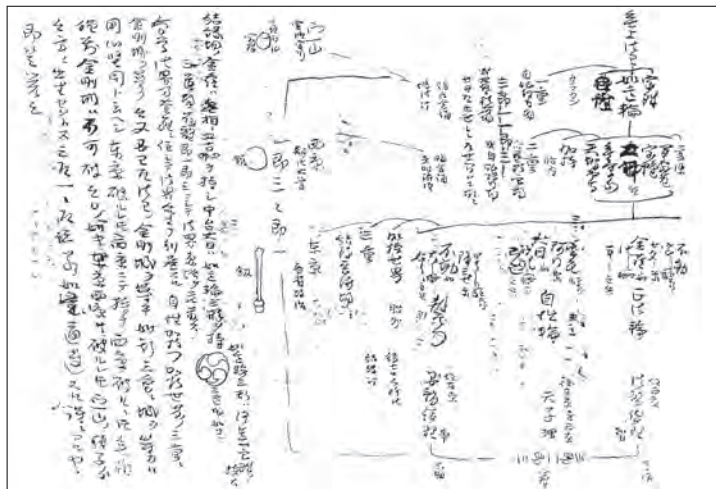


図7 同上続き 用箋 裏

22 十一月二十九日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県下大和国宇陀郡室生山室生寺住職 丸山貫長

殿 親展拝復

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 封

拝啓 去ル廿三日の御書面一昨日敬読仕候 精細高示ヲ蒙リ妙旨更ニ妙ナルヲ覚ユ 猶能ク熟読熟考して疑問アラハ申出へく候 不取敢右御請迄 猶々時下御自愛奉祈候 草々頓首

十一月廿九日 覚三

貫長大阿闍梨耶 座下

23 十二月四日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県下大和国宇陀郡室生山室生寺住職 丸山貫長

殿 親展

【裏】東京中根岸 (墨汚れ) 岡倉覚三 (封印) 嚴 (中封筒)

【表】親展 【裏】(封印) 固

阿闍梨の妙智ハ宝囊ニ天河の水を盛ルニ似タリ 之ヲ刺セハ一滴灑て地上の洪波ヲ為スノ觀アリ 過日御懇示の趣 不知の濁濊ヲ洗ヒ去リ大二裨益アルヲ覚ヘ候 微細の点猶深意ヲ敲キタキモノアリと雖ども 三重の秘訣秘訣会シ来レハ亦明カナルカ如シ 一成功の後 西京着手の事 至極適當ニ有之 夫々準備可致 方法ニ至テハ御出京ノ時篤と可得貴意候 結集の菩薩既ニ二人ヲ得タリ 此上三人心当り御座候 是亦御出の節ヲ期シ決行可仕 精々御身體御養護 将来の大事業ヲ

緩々計画相成度 先ハ御礼迄 草々敬具

十二月三日夜 丸山貫長 覚三 拝

丸山大阿闍梨耶 座下

仏書中真教の妙意ヲ探り候参考書ハ何ニ可然哉 乍憚御示し被下度又先頃登山の節 仏典中仏教ヲ破シタル経の名目御示し被成下処 例の疎懶ニて何れカニ藏メ忘れ困り居候 申兼候へ共再タヒ御示被下候ハ、大幸ニ存候 御迷惑の事申出恐縮千万ニ御座候

24 十二月二十二日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県下大和国宇陀郡室生山室生寺住職 丸山貫長

殿 親展

【裏】東京下谷中根岸四番地 岡倉覚三

過日は御書面被下早速書目御垂示相成 毎々の御手数有難く存候 年も程なく暮行き 世外ニても何とやら御世話しき事と奉察候 前途の事業壮大ヲ期し候からは御身体御養護被下 緩々施行を計り度 必ズ御身体ニ無理なる御勉の無之様祈り居候 尚来月御彫像終り候ハ、拝顔ヲ得度 今より楽ミ居候 草々敬具 十二月二十一日 丸山貫長 覚三 丸山阿闍梨耶 座下 別封は小々ニ候へ共 聊か供養の寸志ニ御座候 25 明治二十五年十二月二十六日 (消印) 丸山貫長宛 封書 他 一点同封

【表】奈良県下大和国添上郡西ノ京薬師寺ニ於テ 室生山

住職 丸山貫長殿 親展

〔付箋〕 大和国奈良局調

【裏】東京下谷区中根岸町四番地 岡倉覚三

薬師寺よりの尊書落手仕候 去ル廿二日室生山へ向け御返辞書留にて
差出置候 既ニ御覽被下候哉 書目早速御垂示の段 有難く奉存候
微妙なる愛染王の画像有之候趣御通知被下 万謝之至ニ御座候 則金
拾五円封入候間 乍御手数拙者の為メ御求被下 運賃先払にて御送付
被下度願候 又右ハ勿論普賢寺現在の什物ニ無之と存候へ共 為念此
辺御調へ置被下度 先は拝答迄
廿五年十二月廿五日 覚三
貫長阿闍梨耶 座下
小生健全ニ罷在 心の寿命も堅固と存候 御安心被下度 一陽来復
拝顔ヲ得るヲ俟待候

26 一月一日 (消印) 丸山貫長宛 封書

明治二十六 (一八九三) 年

【表】奈良県下大和国奈良西ノ京薬師寺ニテ 室生山住職
丸山貫長殿 親展

【裏】東京下谷中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 封

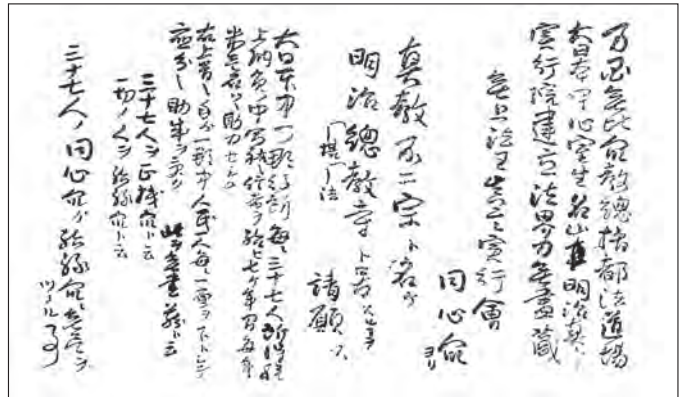


図8 同封の丸山貫長筆「真言不二宗」計画書
用箋 17.2 × 30.2

恭賀新年

明治廿六年一月一日 岡倉覚三

貫長大阿闍梨耶 座下

副伸 廿九日附葉師寺よりの御葉書今朝落手仕候 本尊御敬刻の中

無恙御越年相成候事と存候 過日来御差示の諸経中 二三求め来りて

慧解ヲ試ミ候 下根無明ニシテ高示ヲ仰カサルヘカラサルもの多し

重ねく、拝鳳の念相増し候 而し法機到来の兆あり 昨年末更ニ二人

の菩薩ヲ結集し得タリ 猶精々加持力ヲ垂れ給へ 御身體の事必ス御

撰養相成度希望仕候

27 一月三十日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県大和国宇陀郡室生山室生寺ニ於テ 丸山貫長

殿 親展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 固

前後二回の御書拝披仕候 来月中旬御都合にて御上京の趣 何よりの

好音信 今より喜び御待申上候 愛染王の像御譲受被下候由 御迷惑

の至と存候 御厚情万謝ニ耐ヘス 何れ拝眉の節御礼申述度 東京ニ

ても有志の者共御光臨ヲ希望罷在候

一月三十日

覚三

丸山大阿闍梨耶 座下

28 明治二十六年 (年次推定) 三月五日 丸山栄真宛 封書

【表】丸山栄真様 親展 (切手、宛先住所なし。次の書簡

29 に同封か)

【裏】東京下谷 岡倉覚三 (封印) 〆

内々得貴意度

拜啓 近頃御模様如何ニ御座候哉 時候柄殊に御自愛相成度希望仕候

陳者此度貫長大阿闍梨御上京ニ就テハ結縁授法ヲ願出候もの今日迄ニ

て既ニ九人 聴講のもの此外にて十四人 皆大ニ発心の様子相見へ

此分にては大法建立の機も不遠ト存候 共ニ御喜び被下度候 然ルニ

阿闍梨此儘御帰山相成候てハ折角の機縁も空敷相成 寔ニ遺憾の至と

存候ニ付 法兄ニハ寺務担任御困難とは恐察候へ共 何分此際特ニ御

力ヲ致サレ 少くも両三月間ハ留守の事業御維持被下度願候 当方ニ

て多分の儀ハ目下調ひ兼候へ共 月々七円丈ハ寺費の内へ当地信徒よ

り差出候様取計ひ可申 猶其上新弟子の機熟し候て又々供養の道も可

相立候間 右にて目下の維持の御工夫相立候て 何卒御尽力被下度若

又御不足ニ候ハ、御模様御漏らし被下度願候 何れニても末法中の事

業 困難は眞の嬉楽ト見ルの外無之 精々御配慮願候 阿闍梨滞京の

儀 御寺務上にて御都合果して如何 小生の考ニハ総ての事情ヲ取纏

め候上ニハ当地ニ御滞留相成 法福示現の徳ヲ満スルは最勝の道ト断

め居候 大兄御高慮御漏し被下度 御見込ニより金員直チニ御送り可

申上候

草々頓首

三月五日

法弟 覚三拜

栄真大兄 座下

副住職ヲ辞サレ修行三昧ニ入られ候趣歡喜ニ耐ヘス 此心大法の為

め遙ニ礼拝礼罷在候 悉地御究め被下度祈念仕候

29 三月六日 (消印) 丸山栄真宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山栄真殿 親展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 封

拝啓 和上御帰りの趣ニ付 別ニ御書ニ対し不申出候 兼而御約束候
資ハ乍微少和上御手本ニ差出置候 此上とも一山の維持大業の成就
迄総而御心ヲ煩ハし度 不取敢御依頼迄

四月十日

法弟 覚三

栄真法兄

呉々も御自愛相成奉願候

30 四月三十日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 固

昨日の御葉書并ニ前日の御書面落手仕候 末法の世間 心細きは申迄
も無之 此上は唯々自身ヲ恃ミテ勇猛精進スルの外アルヘからずと存
候 和上ニ於ても何卒御身体御大切ニ被遊 加持力御添へ被下度 寺
務御担任の為め道場建立後れ候事も不得止次第ニ付 諸般の準備整ヒ
候迄ハ一時御中止相成候ても可然相考られ候 而し本尊御祈念の儀
道場建立の遅速ニ不拘御願申上候 小生外行の儀も夫々計画中ニ御座
候間 乍憚兼而被仰候随求陀羅尼御認め御送付相願候 山林の願書等
御送付御待中上候 先は御願迄 草々頓首

四月三十日

覚三

堅海和上 坐下

山中諸君へ宜敷御伝言被下度

31 五月二日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 拝復 親

展

【裏】東京美術学校ニテ 岡倉覚三 (印) 東京美術学校用

(封印) 固

拝啓 一昨日手紙差上置候処 昨夜御書落手 書類一式併せて到着仕
候 夫々都合相計可申存候 又栄真兄一時東行思ひ止マ (ラ) れ候由
大業の為メ喜しく 何卒可然御伝言被下度願候 先は御手紙落手の
事申上度

五月二日

覚三

堅海阿闍梨 座下

32 五月十二日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展

【裏】東京美術学校ニテ 岡倉覚三 (印) 東京美術学校用

(封印) 固

其後御模様如何ニ候や 日々御噂致居候 精々御加養被下度 又兼而
御相談致候ハ一山維持の為メ工業又ハ産物等東京其他へ向け販路御開

き相成候儀 如何御考ニ候や 次第二依り一臂の力ヲ添へ可申人も可有之と存候ニ付 差向き木材其他の価格詳細御取調へ 急々御通知被下度 先ツ木材販路ヲ得ル事要用ト存候ニ付 左ノ諸項御取調被下度

一 杉ノ木

大サ 長サ 幅等

形 板 丸太等

用法ノ考

其地にてノ価格

大坂へ運搬スルノ価格

京都へ同断

東京へ同断

総テ商人ニ於て適否判断ノ付クヘキ様御認め被下度

一 檜の木

一 其他の貴重要用木

漆其他貴山産物にて差向き輸出相成候ものの原価 同様御示し被下度 右にて夫々問合セ 出来得ヘキ丈助力可仕候 山林の事ハ目下考慮中

ニ御座候 先は用事迄

五月十二日

覚三

堅海和上 座下

33 五月二十四日(消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 封

過日来三回の御紙面ニ接し 大法興隆の御苦心遥察ニ耐へず 直チニ登山拜晤仕度存候へ共 退而一考スルニ 道場建立ノ法ハ主トシテ資財の豊富を本トす 山林の復旧^{*1}過般来問合セ候処にては 当分余程の困難可有之 到底急速の運ニ参ル間敷存候ニ付 此上他ニ其方法を画スル外なし 兼而申上候渡海の儀モ亦其一法と存候間 和上ニ於ても此儀御助勢被下度候様相願候

三道場円満具足の建立は鴻大の企望ニシテ 小子目下ノ資力と計画ヲ以てスレハ行ハレ難ク存候ニ付 此際ハ一道場の基ヲ作り 他^{年機熟}シ時^{到りて}十分精巧のものヲ作り候様致度 差向き完備ヲ求メず候ても遅キニ非スト存候 若又阿闍梨ニ於て生財の好方法アリ 忽チ建立成就の道相立候儀ニ候ハ、何卒御教示ヲ蒙り度次第二依り 応分の御助勢可致 現在小子丈の考にては目途相立兼候間 当分数年の処御待被下度 即事密厳場と観スレハ大宝楼閣王ハ自心ニ建立スルモ可ナルニ非スや 法海の波東ニ流れ又西ニ流ル 海は海タルヲ失ハサルベし 此上は唯々御身體の安康ナランコトヲ希ヒ候のみ 一山目下の財務ニ就き差当り関要ナルハ山の産物ニ販路ヲ求ムル事と存候 此事は兼而御話有之候木材炭類等を大坂東京杯へ向けて出すヲ始めトシ 追々工業ニ着手スルヲ目的トセラレ候方可然 就テハ一応其道ニ経験アル人物近々貴山へ出向候様可致 旅費ハ当方にて支弁可致候へ共 山内滞在取調等の賄ひは御山にて負担被下度 右御都合如何ニや 御一報次第派出候様可致候 此派出スヘキ人は十分信任スヘキ者ニ付 無御遠慮万事御問試相成度候 先は御意見伺旁

草々頓首

五月廿二日

覚三

堅海阿闍梨耶 坐下

三道場直チニ建立の事御見合相成度 愚考ハ同体トして無遠慮申出候次第 不悪御思召被下度 又他ニ高案御座候ハ、御示し被下度 小生目下の姿ニては何事も不便ニ御座候 人生頼ムへきは自心ノ外ニなし 小子悉地成就の時ハ一成就の時ト存居候 大煩惱ハ大菩提タルの観念怠りなく御座候 御叱正被下度

34 六月十九日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 拝復 親展

【裏】東京美術学校ニて 岡倉覚三 (封印) 封

去十二日附の御紙面一通り熟覽仕候 末世法滅の相ニ対し御心痛の程御察し申上候 先頃より御山にて事業興隆之為メ其道ニ功者なる人差出度人も見当り 既ニ派遣の運ニ相成居候処 彼是障礙起り 当分見合セ候事ニ相成 遺憾ニ存候 此上ハ先頃御取調願候諸件御手本ニて御調べ被下度 運搬上の都合次第必ス見込可相立存候 山林の儀ニ付其方ニ精シキ人ニ意見段々問合セ候 先頃御願書ニ対し別紙の通の考ニ候間 篤と御熟考被下 其上ニて更ニ願書の御運ニ相成可然存候 次ニ全国御勧進の儀ハ勇猛の御企にて 面白く候へ共 今日社会の情勢ニてハ成功覚束なく 一時の奇ヲ弄ひ候様ニてハ却て本来の目的ニ負クへく候 和上御達観の次第も有之候とハ存候へ共 愚考ニてハ深く蔵して徳ヲ修め 天下の来り請フヲ待ツ方適當ト存候 十一面尊御刻成就の上ハ少ナリトモ浄室御建立相成 十分御祈念相成

候ハ、求メスして福の生スル機アルヘシ 靈珠の靈タル所以は自然

ニ光ヲ放ツの徳に依レリ 尚少しく御待被下候ハ、其内ニ何とか方法も相立可申 小生渡海の期も不遠存候ニ付 四五年の内ニは一山根本の道場位ハ何とか可相成と存候 精々御加持被下度願候

和上ノ勧進ヲ贊助スル文の事ハ右の次第故 此際見合セ度 巧妙の点ハ世間具眼者ハ皆認め候ニ付 小生保証的の文は却テ蛇足ナルべく

且目下小生の職務上左様の文ヲ発スル事六ヶ敷御座候 右御同体の儀ニ付 無遠慮申上候 要スルニ愚考ニてハ目下の情況ニて左様大建立

の勧進ハ到底行ハルヘキニ非ス 真教の眞理先ツ人心ヲ動カシ候上に非サレハ 真教の形相上ヨリ多くの喜捨ヲ見ル能ハサルハ勿論 諸宗

紛乱の今日ニ在て過去の如き大勧進ハ頗ル困難ナルヘシ 先ツ御

見合の方可然存候 貴慮如何 重ねて御尋申上候 和上御寿命前途歳月多く存候 急きて大事ヲ誤られざる事希望ニ耐ヘス 尚々御身體御

大切ニ被遊度候

六月十九日

覚三

堅海阿闍梨耶

当分の処登山六ヶ敷候間 乍憚陀羅尼御郵送被下度願候

35 明治二十六年七月五日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 封

未タ公然発表ニ至ラス候へ共 小生支那行の事略内定し 本月十五六日頃東京ヲ発シ渡航の積リニ御座候 往復四個月の見込ニ付 暫くの

間御不沙汰可仕 何卒御祈念願上候 兼而の御陀羅尼十四日迄ニ東京へ着候様願上度 猶時下御加養相成度 不取敢内々申上候

廿六年七月五日

覚三

堅海和上 座下

日課三経^{*1}の挿画^{*1}ハ東京両国吉川町六番地国華社^{*2}ニ命シ極上の木版師の手ニテ彫刻取かゝり申候 三面ツゲ板ニテ二十円の由 其内同社へ向ケ金員御送付被下度

36 七月十四日(消印)

丸山貫長宛 はがき

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿

御書面御像書籍及ダラニ正ニ落掌仕候 明十五日出発の都合ニテ 何れ途中より委細御札可申述候

七月十四日

東京中根岸四番地 岡倉覚三

番外・参考 明治二十六年七月二十八日(消印) 丸山貫長宛 封書

〔岡倉天心全集〕第六卷所収)

【表】奈良県大和国宇陀郡室生山 室生寺 丸山貫長殿

親展

【裏】在長崎港 岡倉覚三 (封印) 固

今夕当港発の船ニテ朝鮮ヲ経テ支那ニ向ひ候 匹馬千里五台の雲ヲ踏むへく長安ニハ青龍の古法窟ヲ探るへく存候 帰朝の上緩々様子可申出 猶時下御大切ニ被遊度願候 尊像陀羅尼御恵贈ヲ蒙り常々護持罷

在候 拝借の書類一先ツ別便ニ付し返上仕候 先は出発^マかげ草々一筆申上候

七月廿八日

覚三

堅海阿闍梨耶 座下

清国内地ハ郵便不届候ニ付四ヶ月程御無沙汰可仕候

37 明治二十六年十二月二十九日 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県下大和国宇陀郡室生山室生寺ニテ 丸山貫長

殿 親展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) ヽ

帰京後多端の事務ニ追われ 心外御無音罷過ぎ候 御許し被下度 過日の御紙面寔ニ有難く 其内拝晤ヲ得度楽み居候 天下為すへき事多く之ヲ為すの道なきは平生の遺憾ニ候へ共 大道は常ニ一元に導き波瀾の中に平地ヲ得るのみと存候 生々流行して間断なきこそ真の仏化の意なるへし 是迄の妄想も竟ニは実相ヲ現スル時アランカ 猶々御身體御大切ニ被為遊願候 夏中久保田氏^{*1}登山 御様子承り候

草々頓首

廿六年十二月廿九日

覚三

堅海和上 座下

九鬼令夫人^{*2}ハ被申越陀羅尼上木の儀は少々都合有之(金錢の事ニはなし) 小時見合セ相成可然旨小生より申上置候 右御含み被下度

明治二十七年(一八九四)年

38 一月六日 (消印) 丸山貫長宛 封筒のみ

【表】奈良県大和国宇陀郡室生山室生寺にて 丸山貫長殿
親展

【裏】東京下谷中根岸 岡倉覚三 (封印) 固

39 一月九日 (消印) 丸山貫長宛 封筒のみ

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展

【裏】東京中根岸四番地 岡倉覚三 (封印) 固

40 三月二十五日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展
【裏】東京下谷中根岸 岡倉覚三 (封印) 〆

41 十一月十六日 (消印) 室生寺留守宛 封書

【表】奈良県大和国宇陀郡室生山 室生寺留守御中 親展
【裏】東京美術学校にて 岡倉覚三 (印) 東京美術学校

(封印) 〆

返事出十二月九日

拝誦 御通知^{*1}の趣驚入候 猶詳細の御模様承らす候ては何とも取計方

無之 奈良地方にては誰しか周旋罷在候や 保釈の方法如何なり居候

や 最初^{*2}の手續御示し被下度 勿々頓首

十一月十六日

覚三

室生寺御留守御中

明治二十八(二八九五)年

42 三月十九日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】大和国宇陀郡室生山室生寺 丸山貫長殿 親展
【付箋】宛名人 奈良池之町尾西抱家居住 (印) 大和

国室生山執事印

【付箋】奈良廻 (印) 大和山粕 三月二十三日 八便

【付箋】池ノ尾西八平方間合セ配達ノ事 (印) 大和奈

良局三月廿四日

【裏】東京美術学校にて 岡倉覚三 (印) 東京美術学校

(封印) 固

三月廿五日

堅海阿闍梨耶 坐下

栄真師へ宜敷御伝言被下度願仕候

雲霧忽チ晴れ 何より喜しく存候 而し長々御障碍 御身体如何ニ候哉 此際力めて御加養相成度 一山の御様子如何 又将来の御見込如何 御東上ニモ可相成哉 此頃小生知友本多祐甫〔佑輔〕^{*}南都にて拜鳳の趣 先は御健全の趣承り安心罷在候へ共 猶御様子御示し被下度候 勿々頓首

三月十九日

覚三

堅海阿闍梨耶 座下

明治三十(一八九七)年

43 二月十日(消印) 丸山貫長宛 封書

〔表〕大和国宇陀郡室生山 真言実行院 丸山貫長殿 親展 拜復

〔裏〕東京美術学校 岡倉覚三 〔印〕東京美術学校用 〔封印〕^ス

二月二日附の御書面唯今落握 五輪^{*}寸法并ニ愛染王像御寄贈被下有難存候 栄真子無滞帰山の趣 大ニ力ヲ得候 何卒大業不怠御尽力相成度 先ハ御礼迄

二月九日

覚三

堅海〔阿〕闍梨 侍者〔史か〕

明治三十四(一九〇二)年

44 明治三十四年(年次推定) 六月二十一日 丸山貫長宛 封筒なし 謹啓 小生事唯今到着 直チニ参上高聲ニ接し度候へ共 差掛りの要務有之 之ヲ終へ次第罷出度存候 忙中の工夫静観御憐察被下度候 草々頓首

六月廿一日

覚三 再拜

貫長和上 坐下

45 八月十二日(消印) 丸山貫長宛 封書 他一点同封

〔表〕京都府下山城国相楽郡当尾村浄瑠璃寺にて 丸山貫

長殿 親展

〔裏〕京都麩や町 柎や方 岡倉覚三 〔封印〕固

小生事此程南都ニ参候間御東上の趣にて拜晤ヲ得ず 遺憾ニ存仕候 一昨夜来当地ニ参り 来十四日帰東の積りニ候 暑中御見舞 別紙微少ニ候へ共御笑納被下候ハ、幸甚 無窮を趁^{*}ふに有限ヲ以てす 天下の事笑ふて哭くへき事のみと存候 吁々 大道生々活潑 花か夢か 八万四千の塔^{*}は本来建立し了候事と存候 如何

八月十一日

天心生

堅海闍梨 坐下

小詩あり 御笑被下度

仰天自有初 観物竟無吾 星气揺秋剣 氷心裂玉壺

天心

〔同封紙片。裏に「東京美術学校長岡倉覚三書也 明治廿九年」のメモあり。貫長筆か〕

仰天自有初 観物竟無吾 星氣揺秋劍 氷心裂玉壺

天心

年次不明

48 漢詩

高歌縱酒少年場 破戒無慙半世狂
醉裏朦朧心月影 夢中恍惚仏灯光
三生得意住魔界 一笑有時接法王
弥勒睡眠釈迦老 因明以外夜茫茫
天心道士

叱正

〔貫長筆と思われる「多生無意任魔界 一劫有縁接法王」の付記あり〕

明治四十四 (一九二一) 年

46 十月二十日 (消印) 丸山貫長宛 はがき

〔表〕東京府下北豊嶋郡〔破れ〕高田南蔵院にて 丸山貫長様

小生昨日関左*2より帰京 当分滯京仕候

十月廿日 岡倉覚三 〔印〕東京本郷区龍岡町〔破れ〕番〔破れ〕

明治四十五 (一九二二) 年

岡倉もと子書簡

47 一月一日 (消印) 丸山貫長宛 はがき (印刷物)

〔表〕奈良県吉野郡上龍門村栗野 大蔵寺* 丸山貫長殿

木村栄真兄上

謹賀新年

明治四十五年元旦

岡倉覚三

岡倉覚三

常陸国大津町五浦

49 明治四十三年十月二十七日 (消印) 丸山貫長宛 はがき

〔表〕奈良県吉野郡上龍門村栗野 大蔵寺にて 丸山貫長様

十月二十七日 常陸国大津町字五浦 岡倉もと子

先頃は東京にて失礼申上候 其節御咄しには十月中ごろには五浦御出
二相成候様申され候が如何に御座候や 私も此ほど帰浦致し候間 御
都合にていつなりとも御出被下度まぢあげ候 先は御様子御伺旁申上

候

かしこ

50 明治四十四年一月六日(消印) 丸山貫長宛 封書

【表】東京府北豊島郡高田村根生院¹内 丸山貫長様

【裏】一月五日 大津町字五浦 岡倉重戸拜 [封印] ×

新正

明治四十四年一月元旦 岡倉重戸子

丸山貫長様

謹みて御祝ひ申納候

其後は如何遊はし候や 御様子御伺ひ申上度と心には存しなから津ゝ
く失礼致居候 実は先頃当地へ御出被下候やと美術院の人々にも申
付御まち申居候へども 御便なきまゝにゆめと阿きらめ いつれは御
目二かゝらること楽しみに致し居候処 此ほどの御葉かきにて御東上
のことわかり 先々安神致申候 いよく今般御因縁相熟し 十二月
三日二都へ御出のよし 誠に御うれしく 一日も早く御目二かゝ
りて御様子御伺ひ申上度とこゝろばかりあせり候へとも 私事先頃
より神経痛の為になやまされ いまだ床にありしまゝにて 我が心の
まゝにならず 誠に残念ニ御座候 何れ其内にはよろしからんと
存し居候まゝ、出京致し度と考かえ申居候 中村氏ニ御面会遊はし候や
当人は此頃少々心へちがひを致し居候為 我が家にも於らず又私方へも
かげだに見せ不申候 それに付私もうろく心配致し居候 本人には
何事も御内々にて御都合によりて和尚五浦御出の折なにとかして御つ
れ被下候様御願申上候 とても私より申候ても唯今の処にてはまへら

れまじくと存し居候 本人の身をおもへば誠にふびんなる事ニ御座候

これも婦人の為に身をすて申居候 なにとかして心易くいたさせ度

と考かえ申し居候 和尚二も御たすけ被下度候 とも角も御都合遊は

し五浦へ御出被下候様まちあげ申候 病中誠に失礼なるらん筆 御許

被下度候 先は御かへり事までに

かしこ

一月五日夕

もと子

丸山和尚様御もとに 御覧の上御火中御願申上候

51 明治四十四年一月二十六日(消印) 丸山貫長宛 封書

【表】東京府下北豊島郡高田村 根生院内 丸山貫長様

【裏】一月二十六日夕 [印]常陸大津町五浦 岡倉 [封印] ×

一月二十三日付の御文 難有昨日受〔とり〕拜見致し申候 其後は御
機けんよく渡らせられ候事 うれしく存し上申候 私事も是非く御
面会申上度とわそんし居候へとも いまた病氣よろしからず候まゝ、
出京もむづかしく 津ゝく失礼致し居候 主人ことは今年末ならで
は帰朝はいたすまじくと存し居候 何れ来月は私出京致し申べく 其
折にはゆるく御面会申上度と楽しみに致居候 御老体御身御大切に
なし被下度候 私の身二かなひ候事御座候へは御申付被下度候
先は返事まで
かしこ
一月二十六日 五浦にて もと子
丸山和尚様

52 明治四十四年四月四日 (消印) 丸山貫長宛 はがき

【表】東京府下北豊嶋郡高田 根生院内 丸山貫長様

四日 常陸大津五浦 岡倉モト

拝啓 御書面拝見仕候 実は急用有之明日熊本へ出立可致都合に御座候間、何れ五月頃帰京の予定に候間、其節御目にかゝり可申候間、何卒不悪御承引被下度、尚主人事も目下在米中にて今秋か明春に帰国の都合に御座候間、之亦左様御了承被下成度願上候。先ハ乍略儀端書にて御返事迄

不一

53 明治四十四年六月三日 (消印) 丸山貫長宛 はがき

【表】東京府下北豊嶋郡高田村 根生院内 丸山貫長様

六月三日夜 熊本市外春日町七六一、米山方 岡倉基子

其後は御変りも御座なく候や御伺ひ申上候 私事も先月より島根^{*1}の方ニまへり居候て津^ゝ御便も不申失礼致し居候 主人も八月末頃^{*2}は多分帰朝のこと、存し居候 何れ帰宅後は兩人にて御目ニかゝりつもある御物語り〔破損あり〕楽しみに致し居候 先は〔破損あり〕御伺ひ迄

54 大正二年八月二十八日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】奈良県吉野郡上龍門村栗野 大蔵寺住職 丸山貫長様

【裏】八月二十八日 越後国中頸城郡妙香山村赤倉温泉

岡倉もと子〔封印〕

其後は意外の御無音に打過ぎ候処 貴方様には御変りも無く候や 御伺ひ申上候 扱て御承知の如く今春岡倉帰朝後は兎角健康優れず候に付き 去る十六日より当赤倉に静養致し居り候処 過日一度重態に陥りし程に御座候 只今は幾分良好の方には御座候へども 如何にもはかゝしく参らず候間 甚だ恐れ入り候へども何卒病氣平癒の御祈禱を致し被下れ度 伏して御願ひ申し上候 頓首敬白

岡倉もと子

(丸山貫長様)

55 大正二年八月二十八日 (消印) 丸山貫長宛 封書

【表】東京府下北豊島郡高田村 根生院内 丸山貫長様

【付箋】名宛人奈良県高市郡高取町小島寺へ転居候二付
回配相成度候 八月廿八日 根生院執事
【付箋】受信人左記ノ所へ転居候二付御廻送有之度候
大正二年九月一日 子島寺執事

奈良県吉野郡上龍門村大字牧三百二十四番地^{*3}
中龍門局

【裏】八月二十八日 越後国中頸城郡妙香山村赤倉温泉 岡

倉もと子〔封印〕

其の後は意外の御無音に打ち過ぎ候処 貴方様には別段御変りも無之

候や 御伺ひ申上候 扱て御承知の如く今春岡倉帰朝後は兎角に健康
優ぐれ申さず候に付き 去る十六日より当赤倉に参り 只管静養に勉
め申し候処 過日一度重態に陥りし程に御座候 只今は幾分良好の方
には候へども 如何にもはかばかしく不参候間 甚だ恐れ入る御願ひ
に御座候へども 何卒病氣平癒の御祈祷を致し被下れ度 伏して御頼
み申上候
頓首
岡倉もと子

丸山貫長様

九鬼はつ子書簡ほか

56 明治二十六年四月九日(消印) 丸山貫長宛 封書

【表】 下谷区中根岸四番地 岡倉殿方にて 丸山貫長様

御直

【裏】 四月九日 九鬼はつ子^{*1} 四月九日

先日は御心地すくれさせられぬ処へ上り いろ／＼うか／＼まゝに
おもはずもなかうなり あとにて御つかれにていらせられたるにてや
と誠に申訳無そんし上候 昨日はおして会へ御出かけ遊し候よし 今
日ハいかゝに入らせらるゝや 何卒御大切に御養生被遊候やうふか
くねかひ上候 御見舞に上り度存候へとも 三日程まへより小供^{*2}の
わかにか熱をおこし 今日はおゝきによろしく候へとも猶ふせり居り候
まゝ、こゝろならずも文して御様子御伺ひ申上候 恐ながら岡倉様へ
よろしく また昨日坂井氏^{*3}より御伝被下 なにも承り候よし 是又御

つたへ被下候様願上候

かしこ

四月九日

はつ子

丸山和上様

57 明治二十七年(年次推定) 六月二十日(消印) 丸山貫長宛

封書

【表】 小石川区音羽町護国寺^{*1}にて 丸山貫長様

【裏】 小石川原町^{*2} 九鬼拜 (封印) 固

拝啓 只今ハ稀有之大地震ニ御座候処 御高台様ニハ格別御障も無為
在候哉 御尋申上候 当方ニハ何も無事ニ罷在候間 御安心可被下候
先ハ御見舞迄乍略儀申入候 勿々頓首

廿日

九鬼初子代

丸山貫長様

58 明治二十七年七月五日(消印) 丸山貫長宛 封書

【表】 大和国宇陀郡室生村室生寺 丸山貫長様

【裏】 東京小石川原町 九鬼執事 (封印) 封

肅啓 不相変暑氣甚の中ニ御座候得共 別段御障も不被為在す御清康
奉恭賀候 陳者曾て御話御座候大随求陀羅尼御淨写被成下候ハ、縮少
の方宜との事ニ御座候間 何卒右も御含を以て御着手被成下候様仕
度旨申上候様 夫人より被申付候条此義御了知被成下度奉願上
候 肅具

七月五日
丸山阿闍梨尊前 侍曹

59 供養料包み紙 年次不明

御供養 隆一

60 供養料包み紙 年次不明

御供養 九鬼初子

61 供養料包み紙 年次不明

供養料 九鬼初子

62 お布施包み紙 年次不明

おふせ はつ子

その他

63 紙片 (年次、筆者とも不明)

常陸国大津町五浦 岡倉覚三

九鬼執事

〃 もと子 殿行

64 岡倉覚三追悼会案内状 大正二年十一月八日 (消印) 丸山貫長
宛 封書

【表】滋賀県阪田郡南郷里村大字宮司 総持寺* 丸山貫長
殿

【裏】白紙

(印刷物。本文省略)

65 岡倉覚三夫妻施入大蔵寺弁事堂誌 (大正五年五月二十八日丸山貫長筆)

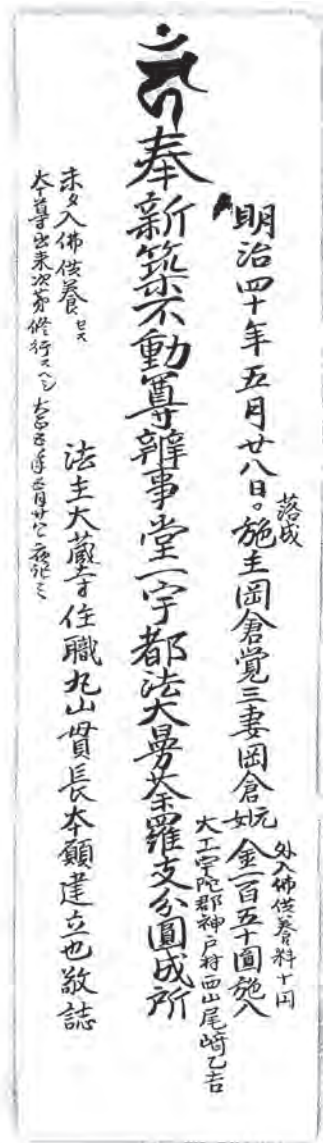


図9 弁事堂誌 51.2 × 13.6cm

書簡解題・注

凡例

- 本誌には丸山貫長所蔵（現在長谷寺所蔵）の岡倉天心書簡、岡倉もと子書簡、九鬼はつ子書簡、その他の四種六十五点の資料に通し番号1～65を付し、四種を区分して掲載した。数量の多い岡倉天心書簡については年号を区切って掲載し、すでに『岡倉天心全集』第六、七巻に収録されている貫長宛天心書簡を番外・参考として転載補充した。
- 発信日付については、資料が原本コピーであるため、消印の全てを読み取ることが出来ず、長谷寺提供コピーに記入されている日付に拠った。
- 封筒欠損や消印不明瞭により年次不明のものは書簡の記述内容によつて判断し、（年次推定）と付記した。
- 解題は以下の順で記した。
 - 1、書簡番号、（ ）として長谷寺資料番号、宛人名、発信日付。
 - 2、書簡の内容、背景等に関する簡略な解説。
 - 3、注。*1、*2のように記した。
- 書き起こしにあたり、原則として新漢字に統一し、句読点にあたる箇所は一字あきとし、「〔 〕」に編者による訂正、語句補充を記した。
- 書き起こしおよび解題は天心書簡研究会（池田久代、鍵岡正謹、堀忠良、山口静一、吉田千鶴子）による。
- 本稿でしばしば引用する『岡倉天心全集』第六、七巻は

一九八〇、八一年平凡社発行である。

岡倉天心書簡

明治二十二（一八八九）年

1 (33・40) 丸山貫長宛（明治二十二年〔年次推定〕五月二十八日）

用箋冒頭に「廿二年第七十号」と記入あり。後世の整理番号か。

岡倉天心（二十七歳）は明治二十一年の近畿古美術調査の際、六月十六日に室生寺を訪れて二泊。住職丸山貫長（四十五歳）に對面し、その人物に感銘を受けた。十八日にはフェノロサもビゲロウとともに室生寺へ行き、恐らく天心に貫長を紹介され、「同寺所蔵の最大の宝物は住職その人だった」「偉大な精神的洞察力と知的情熱にあふれた人物、詩人にして画技彫刻にすぐれ、しかも美術品を蒐集する」とメモ (bMS Am 1759.2 (29), Houghton Library, Harvard Univ.) に書き留めた。なお、当時の室生寺は新義真言宗豊山派総本山長谷寺系の一本寺であった。

本書簡は初対面からほぼ一年を経て、久闊を謝し、貫長の上京を促す意向を兼ねた挨拶状で、長谷寺所蔵天心資料中最初期のものと思われる。

*1 税所子爵 税所篤（さいしよ あつし 一八二八～一九一〇）

*2 旧薩摩藩士。明治二十年子爵。同年より二年間奈良県知事。

*3 九面菩薩 当時法隆寺九面観音を模刻。

*3 本来の事業 真言実行会（不二真教興隆）の事業。

* 4 鳳輦の下 天子のいる都すなわち東京。

2 (32・1) 丸山貫長宛 (六月十八日)

上京して音羽護国寺(真言宗豊山派大本山)に仮泊中の貫長に宿所の件で問合せたもの。

同封(七月)十七日付け書簡は貫長帰山後のもの。領収書(『明教新誌』六ヶ月分一円六十八銭)と稲生真履の名刺同封。

* 1 内務の御模様 貫長は内務省と交渉していた様子。

* 2 拙宅 下谷区中根岸七番地あるいは西黒門町の天心私宅。

* 3 上野護国院 天台宗寛永寺の子院。東京美術学校に隣接。

* 4 (七月) 領収書日付により推定。

* 5 『明教新誌』 明治八年七月大内青巒らによって創刊された隔日刊の代表的仏教新聞。

* 6 稲生真履 (いのう しんり 一八四三〜一九二五)。刀剣等鑑識家。明治二十一年の近畿古美術調査に参加。同二十二年、天心は帝国博物館美術部長を兼任、稲生は歴史部兼美術工芸部技手となった。関西出張中だった稲生(『岡倉天心全集』第六巻所収書簡19)は、天心の紹介で貫長に面談したもののか。

3 (32・42) 丸山貫長宛 (明治二十二年〔年次推定〕六月二十七日)

内容から前項に続くものと推定。字体も前項に酷似。帰山した貫長を懐かしみ再会を願う書状。

* 法爾(ほうに) 自然の定まり。

明治二十四(一八九二)年

4 (32・38) 丸山貫長宛 (明治二十四年〔年次推定〕一月一日)

薬師寺に宿泊中の貫長に年末の酒宴の失礼を詫び、新年二日料亭「松利」での再会を誘う書状。

* 1 天心は明治二十三年十二月二十六日文部省の命により奈良へ出張し、翌年一月八日に帰京した。

* 2 角谷(かどや) 旅館「角定」の主人、のちの「対山楼」のこと。

5 (32・2) 丸山貫長宛 (七月十日)

貫長東京より帰山の際、天心宅に置き忘れた「無上法王象宝図」返送かたがた再会を望む書状。最初奈良県龍田局に誤送されたものか。

* 象王の図「無上法王象宝図」のこと。貫長の製作。大日如来の正法輪身(しょうぼうりんしん)すなわち衆生に正法を説く菩薩として顕現した無上法王は、象宝に坐し侍者を従える転輪聖王(てりんじょうおう、正義を以て世界を治める理想の帝王、輪王)を思わせる。

図は「群盲撫象」。外側に記された「大象捍格具支分」「衆盲各探起諍論」「若開明眼見全体」「耳牙鼻足同一身」、また「外道各執起諍論」「若開慧眼見真相」「空在偏円同法身」等の文言が示すように、分立する仏教各宗派を統一したい貫長の本願を表わしている。左下、ステッキを持って眺める西洋人は耶蘇教の象徴か。貫長が「不二真教」を立教したのは前年(明治二十三年)だった。「真言実行会」はその推進組織。

6 (32-3) 丸山貫長宛 (七月二十一日)

貫長無事帰山の通知を喜ぶ返信。

* 霊山の宝窟 室生山中の三洞窟。龍神(水神)が住むという「龍穴」で、古くから奥に秘宝が埋められ、その周りを悪鬼毒虫が囲んでいるという伝説があつた(『一山記』『続群書類従』第二七輯下)。

7 (32-4) 丸山貫長宛 (八月十五日)

八月八日付け貫長書信に対する返書を兼ねた暑中見舞い。

* 1 天供 天口(てんく)のことか。供物を焼いて本尊に供養する密教の修法。護摩供(ごまく)ともいう。

* 2 品川子爵 品川弥二郎(一八四三〜一九〇〇)。長州藩出身の政治家。この年(明治二十四年)六月より松方内閣の内務大臣に就任。天竜寺その他古寺保存のために尽力した。

* 3 一山(べんいちざん) 室生寺山号の一つ。

8 (32-5) 丸山貫長宛 (九月一日)

九月三日より天心のために執り行なわれる天供(護摩供)に対する礼状。追伸は九鬼隆一に貫長コレクションを一部買収したい意向のあつたことを示している。

* 九鬼君 九鬼隆一(一八五二〜一九三二)。兵庫県出身の美術行政官。当時帝国博物館総長で天心の上司だった。

9 (32-6) 丸山貫長宛 (十一月十一日)

天供結願の礼状に添え、貫長より依頼された東京での日課三経版刻の件に付き問合わせ中であることを報告。

* 井上宣文 明治二十二年東京美術学校第一期生として入学したが、間もなく退学。貫長との関わりなど不明。

10 (32-7) 丸山貫長宛 (十二月五日)

前便にて問合わせ中の日課三経上刻費用に付き報告。

11 (32-8) 丸山貫長宛 (十二月九日)

御供物受取状。署名に初めて「弟子覚三」。

明治二十五(一八九二)年

12 (32-9) 丸山貫長宛 (一月二日)

年賀状。

13 (32-10) 丸山貫長宛 (三月十六日)

関西出張中室生寺登山、久しぶりに貫長阿闍梨の法話を聴聞、あわせて龍穴を検分することを願う書状。

* 1 京都奈良へ出張 三月十五日宮内省より京都・奈良の帝国博物館建設実地検分のため出張命令を受けた。

* 2 角谷方 書簡4の*2参照。

14 (32-39) 丸山貫長宛 (明治二十五年〔年次推定〕三月二十八日)

室生寺登山の礼状。年次は内容より推定。文末の漢詩は龍穴検分の感想。

* 1 新堂植田松三 不明。書状を託された人物か。新堂は現大和田市にある。

* 2 来年の事業 室生山中に不二真教の三道場を建設することか。

* 3 汽船にて 神戸から海路帰京か。

* 4 栄真法堅の両氏 室生寺在住の僧侶。貫長の弟子。栄真は丸山栄真また木村栄真。後に子嶋寺住職となる。

15 (32・11) 丸山貫長宛 (四月二十七日)

来信への礼状を兼ねて近況を報告。また、貫長の女性問題について意見を吐露している。なお、貫長は明治二十七年六月高見キヌと結婚した。

* 1 米国の大会 一八九三年のシカゴ万博 (五月〜十月) のこと。

* 2 独逸国美術大会 ババリア (ドイツ連邦) 万国美術展覧会。政府主体の参加ではなかったが、天心は大いに尽力し、自費で視察に赴く計画もしていたようであり (明治二十五年四月二十四日『大阪朝日新聞』、翌二十六年にババリア国王から「ハイリケ・ミハイル第二等勲章」を授与された。

* 3 優婆夷 (うはい) 在家の女性仏教信者。

* 4 小牧知事 小牧昌業 (こまきまさなり 一八四三〜一九三二)。

鹿兒島藩出身の官僚。明治二十二年十二月より同二十七年一月まで奈良県知事。

* 5 堅海 貫長の法号の一つ。

16 (32・12) 丸山貫長宛 (五月十日)

臨時全国宝物取調局鑑査登録済みの室生寺蔵幅釈迦三尊像が売品になったことを聞き、貫長に注意を促し、処置に助力しようという通知。

* 九鬼君 帝国博物館総長九鬼隆一。

17 (32・13) 丸山貫長宛 (十月十日)

不二真教興隆について些かなりとも尽力したい気持ちを述べ、かつ、そのための上京を促す書状。この頃貫長は奈良薬師寺に滞在。

* 三十七人結集の儀 真教興隆のため、まず三十七人の中核的信者 (財政上の支援者) を募るといふ貫長の計画。三十七は金剛界曼荼羅の中心成身会に描かれる三十七尊に拠るものか。さとりに至る三十七の徳目ないし修行階程を象徴したものである。

18 (32・14) 丸山貫長宛 (十月二十五日)

前便に引続き、真教の意義に関する自分の見解を述べた書状。初めて「弟子覚三」と署名している。

* 1 世間出世間 世俗社会と、俗界を離れた仏道の世界との別。俗人と僧侶。

* 2 三一至妙の理 世間と出世間、及び両者を統合する理念の意か。

* 3 輪王 転輪聖王の略。俗界の王。

* 4 法王 仏法に従って統治する国王。法門の王。

* 5 事理二相 「事」は個別的具体的な事業・現象、「理」は普遍的な絶対・平等の真理を指す。

* 6 中和の本体「事」と「理」とが一体不可分であることを説く理念。

* 7 加持力 加護の力。

* 8 行道 仙道修行。

19 (32・4) 丸山貫長宛 (十月三十一日)

十月二十八日付け貫長書簡落掌拝読を伝える返書。

20 (32・15) 丸山貫長宛 (十一月二日)

十月二十八日付け不二真教道場建立に関する貫長書簡に接し、まず貫長に入門した上は真教興隆に尽力することを誓い、貫長の計画に対して自説を披瀝し、かつ貫長の上京を促す書状。

* 1 三道場 不二真教の中心となる三道場、すなわち「理智ノ道場(自性練行道場)」「慈濟道場」「衆芸精究道場」。

* 2 密厳場 密厳浄土(大日如来を中心とする五智如来の世界)を表わす道場。

* 3 慈濟結縁の門 慈濟道場を東京に建立する案。

21 (32・16) 丸山貫長宛 (十一月十六日)

貫長からの書留便(十一月十一日)に対する返書。貫長は天心の意見を参考に自ら構想する不二真教道場と、国王即無上法王を頂点とする政治的組織とを詳細に図示して書き送った。すなわち三道場(自性練行道場・結縁慈濟道場・衆芸精究道場)を本部ハ一山(室生寺)の自性道場、および西京の加持門道場、東京の加持世界道場とにそれぞれ

れ建立すること、また、国王即無上法王の下に法務総理と国務総理を置き、法務総理は耶蘇教を含む全宗教を、国務総理は議会をはじめ各省庁を統括するという構想だった(同封三函参照)。

これに対し天心は更に自説を述べて修正案を示し、明治政府に即応した法王則国王の簡略な構成図を「無上法王曼荼羅」として返送している。曼荼羅最下段で各省を括る「輪宝」「玉女宝」「神珠寶」「主兵宝」「居士宝」「象宝」「馬宝」は転輪聖王のもつ「七宝」で、貫長図表に拠ったもの。

なお、貫長は外敵の侵入を想定し「東京破ル、トモ西京ニテ持チ、西京破ル、トモ絶対金剛城ハ不可破云々」の文言を含む註を施しているが(同封第二函)天心はこれに言及していない。

* 1 在家菩薩 書簡26の*4参照。

* 2 天堂 本部ハ一山における自性練行道場。

22 (32・17) 丸山貫長宛 (十一月二十九日)

前便に対する二十三日付け貫長書簡(不二真教道場建立の件)への返書。

23 (32・18) 丸山貫長宛 (十二月四日)

前便に対する貫長の解説に関する礼状。ハ一山道場成功後に西京の道場建立について相談したい旨伝える。

* 1 三重の秘訣 「三至妙の理」に同じ。書簡18の注参照。

* 2 参考書 追伸の形で不二真教の依拠する仏典の教示を乞うている。

* 3 仏書ヲ破シタル経 不詳。男女の愛欲を肯定した『理趣経』の如きものか。

24 (32 - 19) 丸山貫長宛 (十二月二十二日)

貫長の回答 (前便仏典の件) に対する礼状。

25 (32 - 20) 丸山貫長宛 (十二月二十六日)

奈良薬師寺に留錫中の貫長に宛て、天心のために購入した愛染明王画像 (普賢寺旧蔵) に対する礼状。貫長来春の上京を示唆している。同封メモは不二真教の本部室生寺に根本道場 (衆教総括都法道場) を建立経営するに当たり、その経済的基盤を記したものと。
* 普賢寺 現、大御堂観音寺 (京田辺市) のことか。

明治二十六 (一八九三) 年

26 (32 - 21) 丸山貫長宛 (一月一日)

貫長 (旧臘より奈良薬師寺滞在中) への年賀状。

* 1 諸経 貫長に垂示を求めた經典。書簡23参照。

* 2 慧解 (えげ) 智慧をもって物事を理解すること。

* 3 下根 (げこん) 仏道を修する力の弱い者。自分を卑下した呼称。

* 4 菩薩 「菩薩」は不二真教に経済的援助を表明した信者をいう。目標は三十七人。書簡17参照。

27 (32 - 22) 丸山貫長宛 (一月二十日)

二度の書信に対する礼状。二月中旬の貫長上京予定の報を喜び、かつ愛染明王画像 (前便25書簡参照) の礼を述べる。

28 (32 - 23) 丸山栄真宛 (明治二十六年〔年次推定〕三月五日)

切手・宛名を欠く封書。内容は上京中の貫長の更なる滞在を願い、留守を預かる室生寺の栄真にその理由を述べたもの。次便 (書簡29) の封筒に「東京下谷三月六日」「大和山粕三月七日」の消印があるので、これが本便の封筒と思われる。次便の示すように、貫長帰山は四月になつてからであった。

* 1 丸山栄真 貫長の弟子栄真は室生寺副住職だった (封書末尾参照)。木村栄真とも (書簡47参照)。栄真は後に飛行曼荼羅で著名な高取・子嶋寺の住職となる。同寺に貫長の位牌あり。裏に「遺弟栄真」と記す。弟子が肉親か未詳。
* 2 悉地 信仰実践によつて得られる境地。

29 (32 - 23) 丸山栄真宛 (三月六日 [四月十日])

文末の日付 (四月十日) が示すように、封筒を入れ違えたものと思われる。貫長の東京滞在はほぼ二ヶ月に及んだようである。書簡56 (九鬼はつ子書簡) 参照。

30 (32 - 24) 丸山貫長宛 (四月三十日)

帰山した貫長の礼状に対する返書。道場建立の遅滞を慰め、計画中の外国旅行の安全を祈る護符 (陀羅尼) と室生寺山林に関する (内務

省への)願書を送って欲しいと結んでいる。

*1 外行 中国渡航計画か。あるいは文脈および当時の状況からいうと、彼が精力を注ぎ込んだシカゴ万博の視察に渡米し、米国で道場建設資金を集める計画をしていたことも考えられなくはない。

*2 随求陀羅尼(ずいぐだらに)は随求菩薩(観音菩薩の変身)の真言。衆生の求願を成就させる効果のある陀羅尼。

*3 山林の願書 室生寺復興のため、明治四年の上知(寺領一斉没収)により失った山林を取り戻すための(内務省への)願書と思われる。書簡33でも「山林の復旧」に触れている。内務省への仲介をつとめた模様。

31 (32-25) 丸山貫長宛(五月二日)
前便にて請求した書類一式の受領を知らせる返書。

32 (32-26) 丸山貫長宛(五月十二日)
室生寺維持のため山林を伐採して木材を販売する方策について助言し、助力を約束する書状。

33 (32-27) 丸山貫長宛(五月二十四日)
道場建立の資金調達に苦心する貫長に対し、自らの非力を詫びると同時に、性急に事を急がず、当分は密厳道場の本尊を自心に建てるよう勧め、山林復旧は当分困難であるという情報を知らせ、かつ山林の木材を加工販売する専門家を派遣する用意のあることを伝える書状。

*1 山林の復旧 書簡30の*1参照。

*2 渡海の儀 文脈からいえば資金調達の一法として渡海のことか語られているのであって、だとすれば中国旅行ではなくアメリカ行きを想定していたかに見える。

*3 悉地 書簡29の*2参照。

*4 大煩惱ハ大菩提 「煩惱即菩提」は大乗仏教の究極を表わす句として有名となった。すべては真実不変の「真如」の現われであり、「悟り」の実現を妨げる「煩惱」も「真如」の現われにほかならず、それを離れて別に「悟り」はないということ。

34 (32-28) 丸山貫長宛(六月十九日)

木材加工販売専門家派遣の件は故障が起こって中止となったことを伝え、代わりの方策を提案し、さきの山林復旧願書に対する考えを示して熟考を促し、また、貫長が道場建設のため全国勧進の計画を立てて天心に賛助文の作成を依頼したのに対し、その積極性に感歎しながら、「奇を衒い、却って成功覚束なし」と、その中止を勧告するのが主目的の書簡。

この月、天心は室生寺山内に道場(衆芸精究場)を建立する資金百円を寄進している。

* 別紙 現存しない。

35 (32-29) 丸山貫長宛(七月五日)

清国出張内定を知らせる書状。天心は七月十一日に宮内省より出張命令を受け、同十五日早崎梗吉を従えて新橋出発、天津、北京、開封、

洛陽、西安、成都、重慶を巡り、上海を経て十二月六日神戸に帰着した。

* 1 日課三経の挿画 内容不明。

* 2 国華社 美術雑誌『国華』を刊行する出版社。明治二十二年十月、天心、高橋健三、村山龍平らによって創立された。

36 (32・45) 丸山貫長宛（七月十四日）

清国出発前日のはがき。貫長から送付された旅行中の護符（陀羅尼）などの礼状。

37 (32・30) 丸山貫長宛（十二月二十九日）

帰国後多忙の折り貫長からの来信に対する返信。

* 1 久保田氏 久保田鼎（一八五五〜一九四〇、当時帝国博物館主事）と思われる。

* 2 九鬼令夫人 九鬼隆二夫人はつ子（二八六〇〜一九三二）。陀羅尼の件は不詳。

明治二十七年（一八九四年）

38 (32・31) 丸山貫長宛（一月六日）

封筒のみ。

39 (32・32) 丸山貫長宛（一月九日）

封筒のみ。

40 (32・33) 貫長宛（三月二十五日）

貫長書信への返事。最近病氣勝にて諸方に無沙汰、事業への助力目下困難なることを詫げる手紙。

41 (32・34) 室生寺留守宛（十一月十六日）

貫長逮捕拘留されたとの通知に接し、詳細を問い合わせる書簡。封筒裏の「返事出十二月九日」は室生寺僧の筆か。

* 1 御通知 十一月十六日山林盗伐の容疑で貫長が逮捕拘留されたこと。告発者、奈良県知事古沢滋。

* 2 最初よりの手続 最初からの経緯の意。

明治二十八（一八九五年）

42 (32・35) 丸山貫長宛（三月十九日）

貫長の無罪釈放を喜ぶ書状。十九日に投函。二十三日山粕局着、室生寺執事により奈良池之町の尾西八平方に転送され二十四日貫長に配達された。（貫長は勾留中、意に反して室生寺住職を更迭されている。）

* 1 長々御障碍 貫長の拘留は明治二十七年十一月より翌年三月に及んだ。

* 2 本多祐甫（佑輔） 本多天城（一八六七〜一九四六）。明治十九年第二回鑑画会で受賞。東京美術学校第一期生。明治二十八年

一月より研究のため関西へ旅行。同二十九年母校助教教授に就任。

明治三十（一八九七年）

43 (32 - 36) 丸山貫長宛 (十一月十日)

二月二日付け書簡の返信。五輪塔寸法計測、愛染明王寄贈の礼状。

* 五輪 室生寺本堂東側にある五輪塔(重文)のことと思われる。

総高二・〇五メートル。多気国司あるいは北畠親房(一二三四年没)の墓と伝えられる標準的な中世の五輪塔(『大和古寺大観』第六卷)。

明治三十四 (一九〇二) 年

44 (32 - 41) 丸山貫長宛 (明治三十四年〔年次推定〕六月二十一日)

当日(奈良)到着。要務終わり次第訪問したい旨通知。年次については、明治三十四年日本美術院高松展の途次奈良に滞在したときと推定される。堀至徳日記に「(三十四年)六月二十四日 岡倉氏訪問ノ為菊水楼へ行ク」とある。

45 (32 - 37) 丸山貫長宛 (八月十二日)

明治三十四年七月十六日から八月十三日まで、天心は国宝調査のため京都・奈良に出張。八月九日夜から奈良に滞在したが、浄瑠璃寺留錫と聞いていた貫長は上京中で会うことができなかつた。浄瑠璃寺の住職は丸山宝船で、貫長の実弟に当たる。この頃貫長は高取の子嶋寺(住職栄喜)を中心に、弟子堀至徳を助手にして不二真教(真言実行会)の勧進、信者獲得に奔走していた。

この年夏より堀至徳は東京や奈良でしばしば天心と接触、インド行

きを相談。十二月七日門司より共にインドに向かった。

* 1 趁ふ おう〓追う

* 2 八万四千の塔 「八万四千」は仏教で数の多いことを示す語。

明治四十四 (一九〇二) 年

46 (32 - 46) 丸山貫長宛 (十月二十日)

関西より帰京、当分東京に滞在することの通知。この年天心は第四回目のポストン美術館勤務を終えて帰国し、十月は十七日まで二週間ほど関西にいた。このはがきは、貫長の当時東京における止宿先が南蔵院だったことを示す。

* 1 南蔵院 豊島区高田にある新義真言宗豊山派の寺。同寺第二十四世住職だった那須有高阿闍梨は東京における豊山派の重鎮で貫長と親しかった。後に近くの根生院住職となつて明治四十三年七月遷化(享年五十七歳)。翌年、貫長は墓参を兼ねて南蔵院を訪れたものと思われる(現住職野口圭也師談)。

根生院については貫長宛岡倉もと子書簡(50〜53)参照。

* 2 関左 本来は関東を意味するが、天心は関西(関右)を関左と記している。『岡倉天心全集』第七巻所収書簡505参照。

* 3 本郷区龍岡町 本郷区龍岡町三十三番地は橋本雅邦の旧宅の住所。長男の秀邦が住まう。天心は五浦から上京してしばしばここに宿泊した。

明治四十五 (一九〇三) 年

47 (32・47) 丸山貫長・木村榮真宛 (一月一日)

年賀状 (常陸国五浦発信)

* 大蔵寺 奈良県宇陀市栗野にある古寺 (現在龍門真言宗)。平安時代の秘仏薬師如来 (重文) を本尊とする。貫長は明治三十七年山本トヨと再婚、大蔵寺の住職となるが、各地を巡錫して不二真教を布教。昭和二年六月七日同寺にて遷化した (寿八十四歳)。同寺歴代住持墓域に葬られている。同寺には天心夫妻が施主となつて建立された弁事堂が建つ。資料65参照。

年次不明

48 (32・43) 漢詩

明治二十二年五月十八日書簡1に同封か。末尾に貫長の添削と思われる漢文一行が付されている。

岡倉もと子書簡

49 (32・52) 丸山貫長宛 (明治四十三年十月二十七日)

東京から大蔵寺 (書簡47参照) に帰山した貫長に五浦来訪を乞う文。

天心は前月十四日、病氣をおしてポストンに旅立った。

* 岡倉もと子 天心の妻。もと子と称し、元子、重戸子、重藤子、基子とも書いた。

50 (32・48) 丸山貫長宛 (明治四十四年一月六日)

前年十二月上京し根生院に宿泊中の貫長に、年賀を兼ね行方知れずになった中村某の安否につき貫長に相談する書状。今回の貫長根生院滞在は半年以上に及んだ模様 (書簡53参照)。

* 1 根生院 (こんしょういん) 東京豊島区高田にある真言宗豊山派の寺。明治三十六年湯島から現在地に移転したが、江戸時代初期より幕府の祈願寺 (三代將軍家光の乳母春日局の発願により開創) で、古文書や幕府から拝領した美術品など、貴重な資料を多く所蔵していた。貫長は親交のあった那須有高阿闍梨 (書簡46参照) が前年まで同寺第四十五世住職だった関係もあり、美術品等調査のためしばしば来泊したと推察される (現在の住職中村修盛師談)。

* 2 中村氏 不詳。女性問題で出奔か。

51 (32・49) 丸山貫長宛 (明治四十四年一月二十六日)

五浦より根生院宛。貫長との交信続く。

52 (32・53) 丸山貫長宛 (明治四十四年四月四日)

* 熊本 鉄道院技師米山辰夫に嫁いだ長女高麗子の当時の居住地。

53 (32・54) 丸山貫長宛 (明治四十四年六月三日)

もと子宿泊先 (熊本市春日町米山方) よりの近況報告。

* 1 島根 用事不明。

* 2 主人も云々 天心は予定通り同年八月二十八日帰国した。

54 (32 - 50) 丸山貫長宛 (大正二年八月二十八日)

天心は前年八月、インド經由ヨーロッパ回りで米国に向かい、十一月からボストン美術館で五回目の勤務についたが、四ヶ月後病勢悪化して急遽帰国の途につき、四月十一日横浜に帰着、暫く五浦で静養、八月十六日から新潟県赤倉の山荘で療養中だった。この書簡は赤倉で投函したもので、一時重態に陥った天心のため、病氣平癒の祈祷を貫長に懇願している。大蔵寺宛になっているが、貫長の居所不明を慮ってほぼ同文の手紙を東京の根生院にも送っている。次項参照。

55 (32 - 51) 丸山貫長宛 (大正二年八月二十八日)

前便と同時に根生院に宛てたほぼ同文の書状。貫長は根生院には居らず、同寺執事の指示で奈良県の子嶋寺に転送され、更に吉野郡上龍門村字牧三百二十四番地に転送されている。

貫長祈祷の甲斐なく、天心は同年九月三日赤倉の山荘で没した。享年満五十歳。

* 1 根生院 書簡50参照。

* 2 小島寺 正しくは子嶋寺。子嶋曼茶羅(飛行曼茶羅)で著名な奈良県高取町にある古寺。栄真が住職だった明治三十年代、貫長が真言実行会推進の本拠にした。本堂格天井に描かれた梵字の曼茶羅は貫長の筆と伝える。

* 3 吉野郡上龍門村大字牧 未詳。大蔵寺ないし貫長関係者宅の住所か。

九鬼はつ子書簡ほか

56 (32 - 78) 丸山貫長宛 (明治二十六年四月九日)

貫長と面談したことへの礼状。当時貫長は二月中旬から中根岸四番地の天心宅に逗留していた。書簡28および29注参照。

* 1 九鬼はつ子 九鬼隆一夫人(前出)。初子、波津子とも。書簡37注参照。

* 2 小供 九鬼隆一四男周造(当時五歳)か。

* 3 坂井氏 坂井義三郎(犀水。一八七二〜一九四〇)か。坂井犀水は美術ジャーナリスト。九鬼隆一の妹の義弟。周造は中学一、二年の頃(明治二十四、五年)犀水の塾生だった。

57 (32 - 76) 丸山貫長宛 (明治二十七年〔年次推定〕六月二十日)

音羽護国寺滞在の貫長に宛てた地震見舞い。この日午後二時過ぎ、東京湾北部を震源とするM7.0の激震あり、家屋の倒壊、人馬の死傷、火災など甚大な被害をもたらした。「人走り犬叫び八百八町一時は逃げ惑いて生きたる心地なき程なりし」と当時の新聞は報道している。

* 1 護国寺 東京都文京区大塚にある新義真言宗豊山派大本山。

* 2 小石川原町 現文京区白山四丁目、小石川植物園のあたり。九鬼隆一の本宅は麹町区三年町。明治二十年末からはつ子と別居。

58 (32 - 77) 丸山貫長宛九鬼家執事書簡 (明治二十七年七月五日)

予て願上の陀羅尼浄書の件につき、縮小の方を所望とののはつ子の意向を伝言する書信。書簡37の追伸で言及されている陀羅尼のことか。

59 (32 - 79) 九鬼隆一布施包み紙

60 (32 - 80) 九鬼初子布施包み紙

61 (32 - 18) 九鬼初子布施包み紙

62 (32 - 82) 九鬼はつ子布施包み紙

いずれも年月日を欠くが、九鬼隆一夫妻が貫長（真言実行念）の有力な信者兼支援者だったことを示している。

その他

63 (32 - 55) 住所（宛先）紙片

筆者不明。

64 (32 - 57) 丸山貫長宛岡倉天心追悼会案内状

印刷物。大正二年十一月十五日の東京美術学校における岡倉覚三追悼会案内状。発起人中に貫長の名あり。『岡倉天心全集』別巻（一九八一）所載の追悼会案内状（『東京美術学校校友会月報』第十二卷第七号より転載）の文とほぼ同一。なお、月報では文に句読点が付され、発起人は配布された案内状の方が三段組であるのに対して月報では棒組みとされ、案内状に欠落している新海竹太郎の名が末尾に加えられている。

* 総持寺 滋賀県長浜市宮司町にある真言宗豊山派の寺。当時の住職は西嶋観明。

65 (32 - 56) 丸山貫長筆岡倉覚三夫妻弁事堂施入記

明治四十年五月十八日、岡倉天心夫妻が百五十円を施入して大蔵寺（書簡47参照）に弁事堂^{*}を建立したことを、大正五年五月二十八日貫長が書き記したもの。梵字~~を~~「カーン」は不動明王を示す種字。

天心は明治四十年十一月までの約一年間帰国、滞日していた。

* 弁事堂 茅葺きの小堂で、大蔵寺に現存。「弁事（辨事）」は「事業を成し遂げる」意（『仏教語大辞典』）だが、密教では不動・降三世・軍荼利を「弁事明王」としている（『密教大辞典』）。

丸山貫長（一八四一—一九二七）
岡倉天心（一八六三—一九二三）
対照略年譜

堀 忠 良
山 口 静 一
共 編

【参考資料】

新義真言宗豊山派総本山長谷寺所蔵岡倉天心関係書簡

『日出新聞』明治二十一年六月

『密教大辞典』増訂版補遺「クワンチョウ」の項

小島貞三「丸山貫長」『大和タイムス』連載「大和百年の歩み」第

五八〇・五八一（昭和四十三年五月二十五・二十六日）のちに単行

書『大和百年の歩み第二卷文化編』（昭和四十六年十一月）に再

録

『内外日報』平成四年四月二十二日号記事（記者京都総本社大井美保

『ハ一山記』（『統群書類従』第二十七輯（下）

『法隆寺日記』

『堀至徳日誌』（天理市丹波市町堀本家所蔵）

堀忠良メモ

長瀬瑠璃（野田市円福寺名誉住職、貫長の令孫）メモ（資料・家系図

など）

長瀬瑠璃 談話筆記（筆記記者池田久代・堀忠良）

池田久代「奈良における岡倉天心の足跡（1）（2）」『鵬』（天心研究

誌）No.2（Feb.2006）、No.3（Dec.2006）

春日井真也『インド 近景と遠景』同朋舎一九八一年
『南安曇郡誌』『豊科町誌』

安曇野市ホームページ「ゆかりの先人たち」

インターネット情報「丸山貫長」

平凡社『岡倉天心全集』別巻「年譜」



丸山貫長 79 歳 東京四谷、真乗院にて
背後の仏画は自作

文久三	二十歳 通済阿闍梨(第四十九代長谷寺化主) について灌頂壇に入る(阿闍梨となる)
文久二	貫長十九歳 十二月二十六日(西暦一八六三年二月十四日) 天心、横浜に生まれる
万延二	受ける 弟弟子に権田雷斧、第二代豊山孤管長
安政六	新義真言宗豊山派総本山長谷寺に交衆入山(十六歳)
安政五	満願寺(西穂高村栗尾) に入り公忠和尚の弟子となつて剃髮得度、名を公雄と改め貫長と字す(十五歳) (後に虎洞、虚心、堅海、精進山人などの号を用いる)
安政四	※七月十日(旧暦) 室生寺、講堂・書院・護摩堂・庫裏など焼失
安政二	師憲寿遷化、いたく無常を感じて発心、仏門に入る決意を固める(十二歳)
嘉永四	八歳のとき父に連れられ江戸に出て真言僧道本憲寿(浅草蔵前の大護院) に学問とくに書を学ぶ
天保一四	幼くして神童と言われ、画が巧みで四歳のとき天神像を描き郷里の氏神に奉納して称賛される 《十二月六日は西暦一八四四年一月二十五日に当たる》 父丸山源八、母茂の長男 幼名伊太郎 (弟の宝船は西大寺で修行後に浄瑠璃寺住職となる) 里の氏神に奉納して称賛される
丸山貫長・★堀至徳関係	岡倉天心関係
信濃国安曇郡高家村(現安曇野市豊科高家) 大字熊倉に生まれる(旧暦十二月六日) この年十二月二日に改元 正しくは弘化元年	

年齢は生年を一歳(数え年)とする
★印 社会・政治的事件
★印 堀至徳事績

明治元 (二八六八)	※一月三日(慶応三年十二月九日) 王政復古の宣言 貫長二十五歳 天心六歳 ※四月二十日(慶応四年) 神仏判然令 以後、排仏毀釈の運動おこる
明治二 (二八六九)	英語を習い始める(七歳)
明治三 (二八七〇)	母死去
明治四 (二八七二)	高野山において高岡増隆・楠玉諦・遍照尊院栄秀より受法、また室生寺の啓本について諸法流の淵源を究める 長延寺に預けられ玄導和尚より漢籍を学ぶ(九歳)
明治五 (二八七三)	※四月二十五日 教導職制度発足 ※四月二十五日 僧侶の肉食妻帯蓄髮許可される(宗派によっては禁制続く) ※四月二十八日 三条の教則(敬神愛国・天理人道・皇上奉戴) 通達される
明治六 (二八七三)	三十歳 教導職試補となる(以後 累進し大正十二年に中僧正となる) 十月二十八日 師海如和上遷化(七十一歳) 東京日本橋蛸殻町に移転 東京外国語学校に入學(十一歳)
明治七 (二八七四)	一月十四日 長谷寺普門院第八世住職となる(三十一歳)
明治八 (二八七五)	興教大師(新義真言宗の宗祖覚鑿) 作と伝える不動明王像(旧三輪山平等寺本尊)を長岳寺より勧請し(歳) 東京開成学校に進学(十三歳) 十二月二十一日 堀至徳の生涯の友となる大西良慶 多武峰の子院 智光院に生まれる
明治九 (二八七六)	廃寺となった満願寺を再興するため観音講社を設立して基金を作る(二年後再興される) ★十月十日 堀至徳 大和国丹波市(現天理市) に生まれる(父は多武峰の子院 戒光院より帰俗した堀結城)

明治一〇 (一八七七)	安倍文殊院旧堂の一字を移築し普門院本堂を入母屋造り瓦葺きに改築	東京開成学校東京大学と改称(天心 第二学年)
明治一一 (一八七八)		八月 フェノロサ来日 九月より東京大学で講義 フェノロサ(二十六歳) 天心第三学年(十六歳)
明治一二 (一八七九)	二月 室生寺副住職となる (二十六歳) この年、長谷寺における別処栄嚴の大日経講義に出席	
明治一三 (一八八〇)		六月 東京大学卒業(政治学・理財学専攻) 夏 フェノロサに随行して関西古社寺調査 十月 文部省(音楽取調掛)に奉職(十八歳)
明治一四 (一八八一)		十一月 専門学務局に配転
明治一五 (一八八二)	室生寺住職となる(三十九歳) 荒廃した同寺の復興を志し、堂塔の改修、仏像仏画の修復に専念する	秋 小山正太郎に反論して「書ハ美術ナラスノ論ヲ読ム」を发表
明治一六 (一八八三)	六月 内務省より古刹保存金四〇〇円交付される	
明治一七 (一八八四)	六月 綜芸種智院に倣って教育機関「真言実行院」を構想し、同院「畧規」を作成(四十一歳) 七月 山内枯損木私下の許可を得て山内に練行道場を設立、僧俗を越えた仏教復興運動の本拠とする この年、宝生寺興隆により真言宗大教正三条西乖禅から賞状を授与される(明治十七年の頃)	二月 鑑画会発足(フェノロサ・天心らによる美術運動始動)
明治一八 (一八八五)	二月 室生寺山内に真言実行院建立を発願 三月 室生寺五重塔の本尊、五如来を自ら修理する 十月 真言実行院公認される(大阪府知事)	九月十五日 天台僧(三井寺法明院) 桜井敬徳阿奢梨(一八三四)一八八九より菩薩十善戒を受戒(二十三歳)

明治一九 (一八八六)		五月 敬徳より円頓一乗五戒を受戒 雪信の戒号を授与される 十月 フェノロサと共に欧米出張
明治二〇 (一八八七)		十月 帰国 新設東京美術学校幹事(副校長)となる
明治二一 (一八八八)	六月十六日 天心と加納鉄哉を、十八日フェノロサ、ビゲロウを室生寺に迎え、堂宇の修復、仏像仏画の修理・制作など、天心らを驚嘆させる(四十五歳) 六月二十六日 真言実行会(真言実行院護持組織) 設立許可	六月〜九月 畿内古美術調査(九鬼隆一首班、フェノロサら同行)に赴く(二十六歳) 六月五日 フェノロサ 奈良浄教寺で講演
明治二二 (一八八九)	二月 法隆寺所蔵九面観音、同金堂内安置の観音木像を写刻 六月 東京護国寺に留錫 十二月 室生寺不動院を俗別当優婆塞寺と称す	二月 東京美術学校授業開始 五月 帝国博物館理事・美術部長を兼務 十二月十四日 僧桜井敬徳示寂
明治二三 (一八九〇)	この年、不二真教を立教(四十七歳) ★この頃 堀至徳(十五歳) 郡山尋常中学校に寄宿生として在学中(大西良慶と共学) 年末、奈良薬師寺に滞在 十二月三十一日奈良にて出張中の天心に会う	六月 フェノロサ東京美術学校満期退職、翌月帰国 十月 東京美術学校校長となる(二十八歳) この年より貫長宛書信に「弟子覚三」と署名する

<p>明治二六 (二八九三)</p>	<p>明治二五 (二八九二)</p>	<p>明治二四 (二八九一)</p>
<p>一月 葉師寺留錫 二月中旬 四月上旬 東京滞在(天心宅に止宿) 三月 真言実行院(真教)第二道場(衆芸精究場)建立のため天心より一〇〇円の寄進を受ける 四月 山林伐採の許可願につき天心に相談 五月 許可願書類一式を天心に送る 室生寺財務(産物販売)の専門家派遣につき天心より打診あったが、この件中止 六月 真教興隆のため全国勧進を計画、天心中止を勧める 七月 天心の清国出張に際し護符の陀羅尼を送る 十二月 九鬼夫人への陀羅尼上木、天心の依頼で中止</p>	<p>十一月 不二真教の大系を表示して天心に送る 十二月 「明治真言実行院」建立趣意書を天心に送る</p>	<p>「無上法王象玉図」(真教)を天心に示す 三月 室生寺護摩堂を修理 七月 旅行より帰山 ★七月 堀至徳 父死去のため郡山尋常中学校を中退する 八月 内務大臣品川弥二郎より室生寺保存の話あり 九月 九鬼隆一に室生寺のため寄付を要請 同日三日より三カ月間、天心のために天供(護摩供養)を行なう 十二月 天心に二経典の上刻を依頼 三月二十三、二十四、二十六日 未山した天心に室生山龍穴を案内(室生寺の采真・法堅、天心を世話する) 四月 優婆夷(女性)問題生じ天心に手紙で相談する 五月 室生寺釈迦三尊画像(宝物鑑査四四一五号)市中に流出 十月 奈良葉師寺に留錫、天心に不二真教の法義を披露し、布教の中核となる支援者三十七人獲得につき協力を要請する 十一月 十一面観音(大作)制作中</p>
<p>五月 貫長に売却木材の種類価格等を問い合わせる 七月十五日 清国出張 十二月六日 帰国</p>	<p>十一月 不二真教信徒として「大系」細部を修正、布教の方法を貫長に助言 十二月 普賢寺旧蔵愛染明王画像購入を貫長に依頼 十五日送金</p>	<p>三月十七、二十六日 関西出張 奈良対山楼(角谷) 宿泊</p>

<p>明治二九 (二八九六)</p>	<p>明治二八 (二八九五)</p>	<p>明治二七 (二八九四)</p>
<p>★一月 この頃 堀至徳(二十一歳) 真言実行院の院生になる 五月 「真言実行院会則」作成 ★六月 堀至徳 貫長より真言実行会の手伝いを命じられる 八月 「宗教改革策草案」を書き 十月 室生寺の住僧ら妻女の山内同居を非難して下山を要求 同月 家族を連れて砥取(現宇陀市室生区)葉師寺(通称葉師堂)に転居する</p>	<p>八月五日 慶雲との間に契約(真言実行院を室生寺と別経営とする、但し室生寺が永久護持すること)を結ぶ 以後十年間真言実行院にて院生の訓育に従事 ★この年 堀至徳(二十歳) 室生寺を訪れ、真言実行院の事業(不二真教の布教)を知る ※四月 日清講和条約 五月十五日 長女富仁(長瀬瑠璃の母) 出生</p>	<p>三月 旅行より帰山 六月 高見キヌを妻とする(五十一歳) 室生寺山内優婆塞寺不動院に居住させる(一男一女を儲けるが、後キヌを弟宝船に添わせる) 七月二十二日 父源八没(八十歳) 七月 大随求菩薩画像・陀羅尼梵体書画を護符としてキヌに与える(後に弟子采真、上記縮小版を出版し渥美半島全域に配布) ※八月一日 日清戦争始まる ★各地、堀至徳、政治結社正義党設立を企画し黨員募集のため大和各地を遊説 十一月二十六日突然逮捕監監される(官林盗伐の嫌疑) 同日 弟子寺嶋観海(法類総代、仏隆寺住職) 貫長に室生寺住職辞任を強要 (後任に長谷寺能満院住職慶雲海量) (のちに豊山派初代管長)</p>
<p>四月二十日 古社寺保存会設置され五月七日委員となる</p>	<p>三月 嫌疑暗れ釈放(釈放後 画家本多天城に会う) ★三月 堀至徳、浄土宗の僧澤亮玄を師として仏教を学び、共に正義党活動(軍用草鞋募集運動)を始める ※四月 日清講和条約 五月十五日 長女富仁(長瀬瑠璃の母) 出生</p>	<p>三月 嫌疑暗れ釈放(釈放後 画家本多天城に会う) ★三月 堀至徳、浄土宗の僧澤亮玄を師として仏教を学び、共に正義党活動(軍用草鞋募集運動)を始める ※四月 日清講和条約 五月十五日 長女富仁(長瀬瑠璃の母) 出生</p>

<p>明治三三 (一九〇〇)</p>	<p>★四月 堀至徳真言実行院建立のため「国有林古損木払下願」を真言実行会惣代中山平八郎と連署で農商務大臣曾禰荒助に提出 ★八月二十一日 奈良興福寺において大西良慶と共に貫長より三寶院流金胎兩部伝法血脈を相伝 九月十八日 砥取薬師堂にて「如意宝幢會願文」「如意宝幢會大意」を書す</p>	
<p>明治三二 (一八九九)</p>	<p>★三月二日 堀至徳 砥取薬師堂において両部印可を授けられる 九月 京都府棚倉の光明山に滞在して布教 ★堀至徳 光明山を拠点に真言実行会会員募集 九月 『真教興隆論要略』を法隆寺実相院・山城光明山において草す 十二月 「不」真教公称願」を堀至徳と連署で内務省に提出 十二月 砥取薬師堂に於いて「諸宗分別ノ事」を書す</p>	
<p>明治三二 (一八九八)</p>	<p>七月 「不二真教 名称簡擇ノ事」を書す 八月十九日 長男円珠出生 ★十月 堀至徳 檄文「真言実行会を興すの意」を執筆、配布 この頃キヌとの夫婦生活が事実上破綻する</p>	<p>三月 帝国博物館理事・東京美術学校長辞任(三十六歳) 七月 日本美術院創設され評議員に選出される</p>
<p>明治三〇 (一八九七)</p>	<p>一月 実行院を砥取薬師堂に移転し、諸物品を搬出 二月 愛染明王像を制作して天心に寄贈 ★四月八日 堀至徳 貫長より真言実行会大総監に任命され、事務惣理を任される ★八月九月 堀至徳 高取(嘉会所)を中心に真言実行会の会員を募る 九月十月 高取の子嶋寺千寿院天井画(梵字)制作 ★十月 堀至徳 近村を巡り、子嶋寺天井画のため勸進 ★十二月八日 堀至徳 貫長より入壇灌頂を受ける</p>	<p>この年 九鬼夫人はつ子との恋愛最も激しくなる</p>

<p>明治三七 (一九〇四)</p>	<p>この年山本トヨと再婚 三男二女を儲ける 【付一2】参照 ※二月十日 日露戦争開始 四月 堀至徳の死によつて真言実行会の活動頓挫し、大蔵寺(現宇陀市大宇陀区栗野)に隠棲(六十一歳) この年 宇治鳳凰堂壁面模写のため妻子と共に鳳凰堂に滞在 年末に大蔵寺に戻る</p>	<p>二月十日 ポストン美術館に招かれ大観・春草・紫水を連れて横浜出航(四十二歳) 十一月 『日本の覚醒』ニューヨークで出版</p>
<p>明治三六 (一九〇三)</p>	<p>★十一月二十四日 堀至徳建築家伊東忠太とインド仏蹟探訪中破傷風に罹りラホール(現パキスタン領)にて急逝 享年二十八歳</p>	<p>五月 『東洋の理想』ロンドンで出版される(四十一歳) 五月 五浦に別荘を求め</p>
<p>明治三五 (一九〇二)</p>	<p>十一月 浄瑠璃寺留錫 十二月 『玉之聲』(丸山貫長・丸山宝船共著 如意宝幢會蔵版)出版(五十九歳) ★堀至徳タートル学園(現ビデユバ・パーラティ大学)にて勉学を続ける</p>	<p>十月 帰国</p>
<p>明治三四 (一九〇一)</p>	<p>★四月十二日 堀至徳浄瑠璃寺(住職丸山宝船)にて貫長より手彫りの愛染明王香合を与えられる ★六月七月 堀至徳東京で不二真教興隆のため勸募勸進 貫長の紹介で岡倉天心に会い天心のインド旅行計画を知る ★七月一日 至徳、仏教・梵字梵文学研究のためにインド渡航を決意し天心に同行を願う 八月 浄瑠璃寺より東京に向かう</p>	<p>八月 奈良訪問 京都に滞在</p>

明治三八 (一九〇五)	以後、弟子たちへの事教二相の伝授、芸術(仏像・仏画・書の揮毫)の生活を送る ※九月五日 日露講和条約	三月 帰国 十月 渡米↓ポストン美術館
明治三九 (一九〇六)	九月三十日(十一月一日) 東京高田の南蔵院(住職野口有均)にて幸心方一流を伝授 この年丸山宝船(浄瑠璃寺住職貫長の弟)貫長の前妻キヌと二児を引取りキヌと結婚	四月 帰国 五月 『茶の本』ニユーヨークで出版される 十月 清国旅行
明治四十 (一九〇七)	五月 天心夫妻の施入(一五〇円)により大蔵寺に弁事堂落成	三月 帰国 十一月 渡米↓ポストン美術館
明治四一 (一九〇八)		七月 欧州よりシベリア、中国經由で帰国 九月二十一日 フェノロサロンドンで客死
明治四二 (一九〇九)	九月十五日 東京高田の根生院(住職那須有高 翌年遷化)にて曼荼羅講伝	
明治四三 (一九一〇)	十月 大蔵寺在住	九月 術館 渡米↓ポストン美術館
明治四四 (一九一一)	一月 東京根生院に留錫 三月 如意宝幢会衆のために『金光明最勝王經第八』『仏為優填王説王法政論經第三』『仁王護国般若波羅蜜多經要略』に音訓点を施す 十月 東京根生院に留錫 十一月 東京南蔵院に留錫 十一月 高取子嶋寺にて飛行曼荼羅模写	八月 帰国
明治四五 (一九一三)	一月 大蔵寺在住 『金光明最勝王經・仏為優填王説王法政論經・仁王護国般若波羅蜜多經』を如意宝幢会より刊行	五月 中国旅行 八月 インド・欧州經由渡米↓ポストン美術館
大正二 (一九一三)	八月 岡倉夫人より天心病氣平癒の祈禱を懇願される 八月 高取子嶋寺に留錫 十一月 滋賀県長浜宮司の総持寺(住職西嶋観明)に滞在	四月 健康を害して帰国 九月 一日 赤倉の別荘で逝去 享年五十一歳

大正三 (一九一四)	この年、茨城県泉(現つくば市)の慶龍寺に弟子古幡龍光を訪ねる(二帯を順錫中、乞われて長男円珠(二十二歳)を東城寺(土浦市)住職とする)
大正四 (一九一五)	
大正五 (一九一六)	九月一日より一カ月間高野山座主の招請により同山において曼荼羅講伝(同山座主密門有範・東寺法主鎌田観応ら全国から高僧・學者ら来聴 七十二歳) この年東京護国寺にて大日経講伝など(「今弘法貫長」の名声を得る)
大正六 (一九一七)	大蔵寺にて事教二相の伝授・彫刻書画三昧の生活を送る
大正七 (一九一八)	
大正八 (一九一九)	九月 山科随心院にて大日経を講義(七十六歳)
大正九 (一九二〇)	観心寺(大阪)の大随求菩薩像を五十余日かけて模写する
大正一〇 (一九二一)	
大正一一 (一九二二)	七十九歳 この頃の東京における滞在寺院は主として四谷の真成院、下落合の薬王院など 六月 東京市ケ谷谷町にて五種三摩耶を講義 九月 東京新宿多聞院にて悉曇(梵字)を講義し、翌月悉曇伝授 この年宮中に同候して仏教を講じる(同候前侍従真成院にて送迎の肖像写真を撮影 冒頭写真参照)
大正一二 (一九二三)	六月 大蔵寺住職を依願被免となる 七月十七日 田中海応大蔵寺に來駕 師海如和上五十回忌に因み『光雲海如和上行録』掲載の肖像画並びに序文を依頼され執筆
大正一三 (一九一四)	六月 『真教興隆論要略』(明治三十二年稿) 国訳密教刊行会より発行される(八十一歳)
大正一四 (一九一五)	

埋もれた傑僧、丸山貫長

—真言実行院の足跡をたどる—

池 田 久 代

東京美術学校の開講準備に奔走していた若き美術行政官であった岡倉天心（当時二十七歳）は、明治二十一年五月より始まった九鬼隆一を首班とする関西の古社寺調査団三十人の一員として調査に随伴していた。天心はこの調査中、六月十六日に室生寺に赴いてはじめて丸山貫長に出会い、同二十二日には真言実行院においてフェノロサと二人で貫長から灌頂を授与されている。この出会いは法隆寺の救世観音の開扉（明治十七年）につぐもう一つの「快事」を天心にもたらしたといえるだろう。貫長は生きた仏教精神のモデルとして天心の心を突き動かしたようだ。フェノロサは貫長との初対面の印象を、「最高の至宝は住職（貫長）自身で、（中略）偉大な精神的洞察力と知的創造力の持ち主であった」と述懐している¹⁾。

今回長谷寺のご好意により公表することになった岡倉天心長谷寺書簡（明治二十二年—四十五年、天心書簡は計四十七通）は、室生寺での出会いから十三年間の天心・貫長の関係を明かす貴重な資料である。天心の突然のインド行き（一九〇二）から『東洋の理想』（一九〇三）の出版に至る経緯、具体的には、天心の仏教改革運動の思想的背景、スワミ・ヴィヴェーカーナンダを招聘しての東洋宗教会議開催構想などが、この貫長への天心書簡によってかなり明らかになった。

*

丸山貫長（一八四三—一九二七）は長野県安曇野に生まれ、縁あって十七歳で新義真言宗長谷寺に入山（一八五九）した。長谷寺能満院光雲海如（大伝法院流正嫡第四十七祖）のもとで戒法（戒律）、事相（実践方法）、梵学（サンスクリット語）を学び、事教二相を極めた学僧であった。また、貫長は幼少の頃から画才を発揮し、同じく光雲海如のもとで梵学を学び、六角堂能満院仏画工房の中心となった大願和尚（一七九八、会津生まれ）と並ぶ真言宗きつての画僧であった。

貫長は長谷寺普門院住職（一八七四）をへて、明治十五年（一八八二）には和州室生寺の住職を拝命した。学究と修行に明け暮れた貫長が、女人高野で名高い古刹・室生寺で目にしたものは、廃仏毀釈による荒廃のただ中にある伽藍、諸仏であった。貫長は即座に金堂、灌頂堂、大師堂、五重塔、本尊、五如来などの修復に着手している。貫長が最初に手がけた仕事は、荒れ果てた伽藍の修復作業であったが、廃仏毀釈による真の荒廃は法灯そのものの衰退にあった。貫長は明治十七年（一八八四）より室生寺において仏教復興運動を開始している。明治日本の国家的人材の養成を主眼に、僧俗あわせた「真言実行院」の構想を打ち出し、明治十七年には「真言実行院規則」を作成し、明治十八年の「真言実行院建立願書」の提出と許可を経て、明治二十一年六月二十六日に「真言実行院」開設が大阪府より許可されている。「真言実行院」運動が軌道に乗ったちょうどこの時期に、天心とフェノロサは貫長に出会い、翌年明治二十二年より、今回公表された長谷寺天心書簡がはじまっている。

室生寺に始まる丸山貫長の仏教復興運動は、弘法大師の教えである綜芸種智院構想²の具現化と実践であったが、さらに、江戸末期の偉大な学僧で、超宗派の立場を貫いた慈雲尊者（二七二八—一八〇五）の「正法律」³の系統を引いていると言えるかもしれない。光雲海如は慈雲尊者よりサンスクリット語の学修を通した原典主義的な梵学、戒法、事相を継承し、能満院の弟子であった大願や貫長にその法灯（梵学と戒法に基づいた真言密教）を口伝した。貫長が室生寺で展開した不二真教の運動は、実行院の一番弟子であった堀至徳（一八七六一—一九〇三）へ、そして、貫長の仏弟子となってこの運動に深く関わっていた天心へと伝えられていった。

不二真教の教えとは、①法爾自然の理法（真如、妙法）を解き明かした真実説であるため、②様々な方便としての仮教の陰に隠れて見えにくいものだが、③大乘仏教の不二（対立する二つは根底において一体であること）の教えに真摯に対峙していく教えである。極楽や天国はどこか他の場所であり、そこへ至るためには五常五戒などの修行をし、煩惱を捨てて菩提を得なければならぬといった「仮教」の教えも、形（実体）に付随する影の現れとしてそれなりの役目を果たしている。時と場合によつては役に立つ事もあつた。このような仮教の背後にある真の教えが「真教」である。真教の教えの根本は不二であり、また、相即（当相即道）、煩惱即菩提であるために「この世界が楽土であり、この人が神佛」となる。貫長はこれを「不二の寶珠」と呼んだ。不二真教では、本尊の「如意寶珠」に帰依して「大明陀羅尼（寶珠の神呪）」を誦えるとき、一切の神仏が集まつてその人を守り賛嘆すると説いている⁴。

以上の不二真教の教理の根底には、スワミ・ヴィヴェーカーナンダがシカゴ万博の宗教会議（一八九三）で提唱した世界教会主義的寛大さ（エキユメニカリズム）があり、禪宗がよつて立つ「今、ここ涅槃」の現実主義、「酒肉五辛浄不浄」を問わず、天から頂いたあるがままのこの命で「即身成仏」という真言宗の教えなどが伺える。

*

さて、貫長は室生寺山内の不動院を優婆塞寺（在家の男性修行者）として在家の修行道場とし、堀至徳を総監（事務総理）として会員の募集や実行院の基礎固めと布教活動を展開していった。大和一円で、高市郡高取の小嶋寺（弟子の木村栄真権大僧が住職）や山城（現在の棚倉）の光明山寺（東大寺、後に興福寺末寺で現在は退転）、同じく棚倉の白鳳仏で名高い蟹満寺、京都府木津川市にある行基建立の九休寺（浄瑠璃寺、実弟であり弟子の丸山宝船少和尚が住職）、興福寺、西の京の薬師寺などに赴いて至徳とともに真言実行院の布教を続けた。明治三十四年、至徳が天心とともにインドに旅立つてからは、真言実行院の布教活動は事実上休止状態に陥つたように思われる。明治三十五年には実弟の丸山宝船が住職を務める九休寺（浄瑠璃寺）に逗留して『玉の声』などの執筆をしているが、明治三十六年のインドでの至徳の客死を貫長はどのような気持ちで受け止めたのだろうか。愛弟子を失い還暦を迎えた貫長は、明治三十七年日露戦争勃発の年に宇陀郡栗野の大蔵寺に移り、弘法大師ゆかりのこの山寺（龍門真言宗雲管山医王院）を終の住処とした。大蔵寺については、本書簡にもあ

るように、天心夫妻が百五十円の施入をして建てた弁事堂が今も往事を忍ばせている。

*

さて、貫長の生涯には謎の部分が少ないからずあり、官林盗伐事件や室生寺住職の辞任事件、優婆夷（在家の女性修行者）の問題など、身辺穏やかでない出来事が起こったが、このような逆風に對しても、貫長は黙々と布教を続けたように思われる。

大和における貫長ゆかりの寺については、現在の室生寺には実行院道場や貫長の足跡を忍ばせるものは全く残っていないが、唯一、明治二十九年十月に貫長が妻子を連れて住んだ室生寺付近の薬師寺（三本松砥取五二〇―二番地）⁵⁾が、つい最近まで残っていた。これ以降、貫長は薬師寺を真言実行院の本拠地として布教活動を継続している。薬師寺内の大柱には、貫長の筆によると思われる漢字と梵語の看板がかけられている。（奉修理薬師佛道場興隆真教祈所。明治三十年二月二十一日、室生寺前任職 沙門堅海敬白）（写真1、2参照）小さな草庵のような薬師寺内には（写真3）、貫長自作の自塑像（写真4）や右手先が折れた本尊（写真5）、極彩色の鮮やかな十二神将の並ぶ祭壇があり、控えの間には三千仏の巨大な掛け軸（和州宇陀郡砥取薬師寺常什物寛政九年七月十七日修補）などが保存され、地元の高老によって守られていた。

貫長は室生寺を追われて明治二十九年より薬師寺に身を置くことになったが、この薬師寺において、室生山の石窟にこもって厳しい修行

を成就した一番弟子の堀至徳に両部印可を授けている。真言実行院建立の本意や証明説明書などの重要な文献を至徳に与えて実行院の経営を任せ、悲願の実行院の本願に取り組み始めたのが、この薬師寺であった。また幻の『真教興隆論要略』を執筆したのも、大和一円のゆかりの諸寺を尋ねて不二真教の布教に専念したのも、この薬師寺を実行院の本拠地とした後の展開であった。平成二十二年の薬師寺の焼失は、大蔵寺を除けば貫長に関わる重要な文献・文化財の喪失となる残念な出来事であった。

*

岡倉天心の心をとらえた丸山貫長の仏教復興運動とはいかなる運動であったのか。天心は真教興隆の大願である「三十七人結集の儀」（書簡17）、の実現のために奔走し、「三道場円満具足の建立」（書簡33）に真剣に取り組み、堅海阿闍梨（貫長）に「尊像陀羅尼」の送付（書簡35以降）を熱心に乞うている。明治二十一年の出会いによって、天心の仏教観は水を得た魚のように飛翔しはじめたといえるだろう。しかし、不二真教の実現の手順については貫長の性急さを諫める文面などもあり、天心の極めて実務的で冷静な一面や、この子弟の関係の微妙な位相が垣間見えて興味深い。

「全国御勧進の儀は勇猛の御企にて面白く候へども、今日社会の情勢にては成功覚束なく、一時の奇を弄び候様にては却って本来の目的に負くべく候。深く蔵して徳を修め、天下の来たり請ふを待つ方適當と存じ候」

（書簡34）

「法海の波は東に流れ、西に流る。海は海たるを失はざるべし」

(書簡33)

註

- (1) 拙論「岡倉天心と奈良」『知に遊ぶ教養』皇学館大学出版部、平成十八年。(この出会いは、天心全集にも記載がない、新資料である。〔室生寺興隆年譜〕参照)
- (2) 学問は総合的に学ぶ事によって智慧の種が芽生える。弘法大師空海著『總芸種智院式并序』より。(圓福寺・長谷瑠璃師による資料参照)
- (3) 河内(大阪)の高貴寺は飲光(慈雲尊者)の寺であり、ここに光雲海如律師像(明治十五年、春日有慶作)がある。
- (4) 掘至徳、「真教一夕話」、真言実行会蔵版、真言実行会、明治三十年鬼宿(八月)。
- (5) 貫長の遺品を多く残すこの薬師寺は、平成二十二年六月に火事で全焼した。

室生山八十八ヶ所霊場案内の第四十三番札所に「薬師堂」(宇陀郡三本松村砥取)があがっているが、この薬師堂は、貫長が真言実行院をうつした薬師寺の敷地内(西隣)にある小さな祠で千手観音(石像)、「伊豫明石寺第四十三番」を祀っている。

この祠も平成二十二年六月の火事で焼失したが、石の千手観音は焼失を免れた。

参考文献

掘至徳資料(堀太郎・堀忠良氏所蔵の日記、書簡その他未整理資料)
香取山圓福寺名誉住職長谷瑠璃師作成の丸山貫長資料「孫からみた丸山貫長観」その他。

岡倉天心 漢詩訳注及び解説

鍵 岡 正 謹

丸山貫長あて岡倉天心の書簡には、新発見の漢詩三首と天心が好んだ漢詩一首がある。これらは「書簡解題・注」に入れてもよかつたが、あえて私の強い思いとともに採りだし、少しばかり解説を加えた。

強い思いとは、三首の漢詩だけを十数年前に偶然に入手した。私は訳注を試み、寺田透先生に「叱正」を乞うた。寺田透先生はすでに亡く、筐底におかれたままになっていた。今度、機会を得たので、あえて私の訳注として発表したい。もし誤読があればすべて私の責任であり、もし秀れた訓読があれば、朱筆を加えて下さった寺田透先生の賜物である。銘記しておきたい。なお平凡社版『岡倉天心全集』に従い、漢詩は正字で、訳注は新字体とした。

一

〔無題〕

〔無題〕

浮世如夢半疑眞

浮世夢の如し 半ば眞を疑う

歌哭交身轉法輪

歌哭し身を交え 法輪を転ず

落月殘花詩実相

落月殘花 詩の実相

行雲流水畫精神

行雲流水 画の精神

萬縁磨盡仙猶鬼

万縁 磨し尽すも 仙なお鬼

衆却消來佛亦人

衆却 消し来れば 仏また人

休向混沌談道德

混沌に向いて 道德を談ずるを止めよ

天魔龍象本同倫

天魔 龍象 もと同倫

天心子 未定

天心子 未定

明治二十二年と推定される五月二十八日付の書簡1にある。「未定」稿の「悪詩」を作ったので「笑評」して下さいと謙遜している。

○浮世夢―人生は夢のようにはかないものだ。李白「春夜宴從弟桃李園序」に「而浮世若夢 為歡幾何」が知られる。○半疑眞―本当かどうか半ば疑わしい。○交身―交は替また更と訓じ、身をかえながらの意とした。○転法輪―仏教語。仏が教えを説く、説法のこと。○万縁磨尽―多くの縁（つながり・えにし・つながり）がすりへる。○衆却消来―「来る（つきたる）」と訓じ、時がたつてみればの意とした。○混沌―いわゆる混沌の意味ではなく、天心の別号で、書簡14にも使っている「混沌子」とし、自分に向かつての意味と解した。○天魔龍象―仏教語。魔王も高僧も。○同倫

—同類のこと。

詩は多重・多義であるからこそ面白い。天心は作詩を十五歳ごろからはじめ生涯にわたる。天心漢詩の面目は、多感な感情、深遠な思考、複雑な内実、誠実な遊び心を、漢詩という表現形式に整えながら、多くの真実を語っていて、天心の「詩と真実」と言えるのではないか。そんなつもりで漢詩を抄してみた。

——人生は夢のように短くはかないと言うが、そうだろうか。仏は変化しながら歌うように哭するように説法をされる。詩の真実は「落月残花」、画の精神は「行雲流水」と対句にしてみた。どのように縁（えにし）がなくなったとて仙人は鬼にかわりなく、どんなに時がたとつと仏（ほとけ）は人間である。混沌と号している俗世間の自分にむかつて道徳なんか説かないでくれ、魔王こそ高僧ではないか。貫長阿闍梨や、如何に——

一年振りに書かれた手紙で、天心は貫長に強く上京をすすめている。その勧誘の文章は面目躍如、室生寺の「名山高臥の情は面白き」に對句のように東京の「風塵もまた榮」という。語をついで「技芸天女の曼荼羅は古来鳳輦の下」云々とある。山奥の名山に住む芸術家でもある貫長に、芸能の中心はやはり下界の塵まみれの首都にあると知っているだけでなく、あまたの女人がいると誘っているかのようであると想像してみたくなるのも、ふたりには女人の煩惱がつきまとうからである。

天心は貫長を「阿闍梨」「阿闍梨耶」と呼ぶ。弟子から師への尊称であり、密教では灌頂を執行できる師である。

二

〔無題〕

〔無題〕

高歌縦酒少年場

高歌 酒を縦にす 少年場

破戒無慙半世狂

破戒 慙無し 半世狂

醉裏朦朧心月影

醉裏 朦朧たり 心月の影

夢中恍惚佛燈光

夢中 恍惚たり 仏燈の光

三生得意住魔界

三生 意に得い 魔界に住す

一笑有時接法王

一笑 時に有りて 法王に接す

彌勤睡眠釋迦老

彌に睡眠に勤しめ 釈迦老よ

因明以外夜茫茫

因明 外を以れば 夜は茫茫たり

天心道士

天心道士

叱正

叱正

一連の貫長あて天心書簡のなかに逸れた一首がある（年次不明、書簡48）。ただ字体や内容から、書簡3に同封されていたのではないかと推量している。

天心のすすめで貫長は明治二十二年六月上旬に上京し護国寺に宿泊（書簡2）との文面にある。文中の「小石川の方」とは、多分、九鬼隆一と同居を拒み小石川原町に別居していた、はつ子を指すと思われる。しばらくの間は滞在すると思っていた貫長は「飄然」と室生寺に帰院、追いかけるように天心は書簡を飛ばし、「高師」貫長に会うことができ「法爾の真相」の縁を得た喜びの礼状に、多分、漢詩を同封したのではと推量する。書簡1と同じ「金蓮座下」を使っている。

○縦酒―ほしいままに酒を飲むこと。○少年場―血気盛んで、俠氣に富む若者がたむろするところ。○破戒無慙―仏教語。戒律を破り少しも恥じない。○酔裏―酔中。○三生―仏教語。前生・今生・後生の三生。○得意―得を合わせ契ちぎると訓じ、意にかなうとした。○魔界―仏教の魔はキリスト教の悪魔と違い、「魔界即仏界」と言われるように、修業者を狂わせる天魔のいる苦界であり、また快樂をもたらす樂園でもある。○法王―仏教語では理法、仏法の王、また閻魔でもある。天心が貫長を呼んでいるのかともとれる。○弥勤―弥勤と誤読しそうであるが、「弥勤」であり、いよいよ勤しむ、即ち長きにわたる修業と解したが、「睡眠」とのつながりが不明。○釈迦老漢などという敬愛の言い方と同じように、老は親しみをこめた呼びかけ。○因妙以外―因妙は、物事の正邪・真偽の理由を論証する仏教的論理学である。仏教世界の内外が意識にあるのか、不明。

——高らかに歌をうたい、酒をたらふく飲む俺たち若者は、戒律なんか破つても少しも恥じとしない、こうした半世を狂つたように生きて来た。いつもどおり酔っぱらい朦朧もうろうとしていると、澄明な月のような心に影がさし、正気をなくし恍惚くわうしていると、遙かむこうに灯明の光がちらつとみえた。過去・現在・未来と俺たちは意のままにまさに魔界にいた。時いたり破顔一笑する法王ともいべき良師に出会った。いややはり覚醒かくせいしないままでいようと思つたりもするのだ、お釈迦さま。出世間しゅっせかんをはずれてみれば、俗世間の夜は茫茫と広々としていてではないか。——

この詩には貫長筆だと思われる小文字で「多生無意住魔界 一却有縁接法王」とある。天心道士と道教の号を使う天心が「叱正」（添削）を望み、「三生得意住魔界 一笑有時接法王」の箇所箇所に、当ると思われる。

仏教語や転倒法を多用した逆説的な詠唱であるために判りづらい。自らの半世を反省しつつ、師を得た喜びを謳うたっていると考えた。

三

入如意山龍窟求寶不爲有感

如意山にょいざんの龍窟りゅうくつに入りて求寶ぐぼ不爲ふゐ 感有かんあり

春雷一夜蟄龍驚

春雷しゅんらい 一夜いちや 蟄龍ちつりゅう 驚おどろき

誰放魔王入法城

誰か放す 魔王 法城に入るを

萬岫無心雲倒落

萬岫 心無く 雲 倒に落ち

九天自在月空生

九天自在 月 空しく生ず

大塊小鬼酒辺影

大塊 小鬼 酒辺の影

白骨青山苔下名

白骨 青山 苔下の名

欲碎靈珠爲粉末

靈珠を碎かんとすれば粉末たり

煩惱百八未分明

煩惱百八 未だ分明ならず

混沌子

混沌子

明治二十五年三月末、天心は京都と奈良に帝国博物館建設の視察に出た。その機会にかねての「宿願」であつた室生山の龍穴に入ることができた。その礼状(書簡14)とともに感激を詩にした。

○如意山―室生山の別称、如意輪山。○龍窟―室生寺建立の以前から室生山は信仰の対象となつていた。その源は山には龍が住むといわれる穴が多くあり、請雨・祈雨の聖地であつた。かつては室生寺の神宮寺であつた龍穴神社の裏山を登ると滝があり、その上方に龍穴とされる岩窟がある。○求宝―室生龍穴には、空海

が師恵果より与えられた如意宝珠を埋めた(『六一山記』)など、宝珠埋蔵の伝承がある。○法城―仏法に守られた城。○万岫―多くの峰のこと。室生山は室生火山群に属し、太古の噴火山の外輪山といわれる精進峰はじめ嶽が連なり、全体の地形は「八葉蓬萊を象どる」とされる、宗教的浄地である。山には奇岩や洞穴が多く、とりわけ室生三龍穴と呼ばれる、東谷の妙吉祥龍穴、西谷の沙羅吉祥龍穴、中之尾の持法吉祥龍穴が知られる。天心らが求宝した龍穴は龍穴神社の妙吉祥龍穴だと思われる。また、「岫」は古語では「くき」と読み、山の洞穴を指す。「万岫」は山にある多くの洞穴でもある。九鬼周造は「自分の名字」で「古語で『岫』とは山の洞のことだから：岫と九鬼は音の上だけでなく、また實際上の關係をも持つている」と紀州の北牟婁郡の九鬼村を紹介した随筆があり、山の龍穴から九鬼へと連想がわく。○九天―九つの天体のある大空。○大塊―大地、あるいは造物主。莊子齊物論「夫大塊噫氣、其名爲風」を想わせる。天心は『莊子』の生命である齊物論の、万物斉同、絶対無差別の思想に影響を受けている。

○小鬼―人の靈魂。○青山―「人間到る所青山あり」と使われる、骨を埋める地、墓地。○欲碎―欲をとすと訓んでいる。○靈珠―天心たちが求めた美麗な宝珠。○煩惱百八―仏教では人間の煩惱(悩み、迷い、苦しみ)は百八あるとされる。○未分明―はつきりしない、明白にならないの意。

―室生山の龍穴に入り伝説の宝珠を求めたが得ることはなかった。時に詩を生んだ。ある夜春雷が鳴りひびき、龍穴に伏していた龍を驚かせたが、しばらく動かないでいる間に、龍穴に入った。

室生の峰々は雲ですつかり隠され、雲のあい間から天空がのぞき月だけがみえる。眼を下にやると、大地にただよう靈魂は酒席での影のごとくさまよい、苔蒸す墓に白骨が名のようにみえる。龍穴に求められた宝珠はすでに粉々になっていっているらしいのは、我ら多くの煩惱と同じ、無明のままである。――

〃女人高野〃と呼ばれる室生寺は、女人禁制の高野山に対して江戸初期より女人の参詣を許す真言宗密教寺院で、優美可憐な堂塔はそれに応わしい。しかし明治初めの神仏分離・廃仏毀釈で衰微していた。明治十二年に長谷寺より室生寺に入住し、十五年には住職となり、復興させたのが丸山貫長である。「貫長は同十五年七月二十一日、室生寺の修理に関する告諭願を真言宗管長権大教正三条西乗禪に提出した。この願いは聞き入れられ、彼は宗内各本山に働きかけ広く淨財（寄付金）を募る活動を始める。同年十月五日、三条西管長からも金三十円が寄贈されるなどして、室生寺は復興された。」（達日出典「室生寺の歴史」）

室生寺の前を流れる室生川を東へむかう道をしばらくゆくと、龍穴神社が杉木立のなかに佇んでいる。十月には龍穴祭でにぎわうが、普段は静寂そのものである。その神社から山に登り、小さな川を少し遡ると小さな滝と大きな床とも思える岩座があり、その前に注連縄をさされた逆三角形の岩穴がある。それが龍穴のひとつ東谷の妙吉祥龍穴である。古来より幾度か龍穴に宝を探す人があったといわれ、天心以降となるが大本教の出口王仁三郎も龍や宝珠を求めて入ったといわれる。室生寺の堂塔や仏像の素晴らしさを堪能したあと、この神社や室生の山に入ると、現在も自然の神秘と畏怖を感じる。天心は室生の堂

塔や仏像の保存はもとより、この自然の神秘と畏怖を感じてきたであろう。

四

〔無題〕

〔無題〕

仰天自有初

天を仰げば 自ずから初有り

觀物竟無吾

物に觀ずれば 意に吾無し

星氣搖秋劍

星氣 秋劍を揺がし

氷心裂玉壺

氷心 玉壺を裂く

天心

天心

明治三十四年八月十二日付書簡14に「小詩あり」として作詩されている。同書簡には別紙に同じ詩が書かれ、裏のメモに貫長筆で「東京美術学校長岡倉覚三書也 明治廿九年」とある。

○仰天―天を仰ぐこと。莊子齊物論「仰天而嘘」（森三樹三郎訳では、天を仰いで大きな息をはく）とある。○無吾―仏教語の無我と同じ。我を否定する私心のないさま。○星氣―星が発する気、星のように偉大で崇高な心気。○秋劍―秋氣をおびたつるぎ、

劍のように研ぎ澄まされた心。○氷心裂玉壺―王昌齡「芙蓉樓送辛漸」の「洛陽親友如相聞 一片氷心在玉壺」（洛陽の友人たちが私の近況を気づかい尋ねてくれたら、玉の壺に盛られた一片の氷のごとく清澄な心境である、と。）の詩句を踏みながら「裂く」と強く謳う。

――天を仰いでいると自然に世界のはじまりを思うようになり、物を観察し感応し尽すと、ついには自分の我は無くなってしまふ。星が発する気は秋気をおび研ぎすまされた劍のように澄んでいて、玉の壺に盛られた氷のごとく清く澄みわたる心境であり、時代に迎合せず、名利など求めはしていない。友よわが真情は玉壺を裂くほどに激^{げき}している。――

この詩は天心が愛好した。平凡社版『岡倉天心全集』第七巻「漢詩文」に竹内実訳詩で掲載され、「墨筆の掛軸があり、またノート片にもペン書きで記入し漢詩の上に“Call From Cathy”とある。現在判明する同詩は『天心全集』甲之一（日本美術院、大正十一年刊）に雄渾な筆蹟が横山大観蔵として掲載され、同じものが岡倉一雄『父岡倉天心』（中央公論社、昭和四十六年刊）の表紙を装い、横山静子氏蔵とある。茨城大学五浦美術研究所には「碧龕居士」と、天心晩年の別号を使う筆墨の同詩がある。この書を図版にのせた木下長宏『岡倉天心』（ミネルヴァ書房、平成六年刊）は「物に観^{かん}ずれば竟に吾無し」を副題にし、一章を設ける。木下はこの詩を天心の「生涯を貫く感慨、隠された通奏低音」であるとした見事な注解をしている。

以上いずれも作詩の年次が判明しなかった。天心後年の作だと推量していたが、貫長へ送られた同詩で明治三十四年と判明した。さらに

は二十九年の東京美術学校長時代だとすれば、天心愛好の詩のみならず、その意味は深く重い。さらに愛好の同詩は、座右の銘のようにより短くされ、「仰天有始 觀物無吾 五浦釣徒」（横山大観記念館所蔵）となる。

貫長あて天心書簡を読み、四首の漢詩を訳注し、その上でこの詩が二十九年作だとして見ると、貫長と天心の「師弟」の相似がくつきり浮かんでくる。短かく言えば、ひとつは仏教復興運動があり、貫長の室生寺再興と真言実行会の強引なまでの実行力、それと天心の日本美術復興運動での古社寺保存や東京美術学校での強力な実行力がある。その基本となるのは、貫長の不二真教、天心の書簡18にみられる「出間出世間の差別相対の消滅」「三一至妙の理」「事現の二相ノ真実ハ中和ノ本体」などの問答は、「アジアは一つ」という不二元論に至る思想がある。もうひとつは、これら書簡の裏中には女人への思慕と煩惱が隠されている。女人高野の住職貫長は結婚妻帯し、一男一女を儲け、それがひきがねなのか官林盗伐の嫌疑をかけられ室生寺を追放される。明治二十七年のことである。同じころからだろう天心は九鬼はつ子への思慕と慈愛と恋愛が引きがねとなり、やがて東京美術学校長辞職の道をたどる、という現実がある。

「廿七年五月廿九日燈下天心」と年記のある「堅海和尚女人成仏の歌の句を抄して」は天心自筆ノート『欧州視察日誌』（明治二十年）の余白に書かれ、同じく余白に書かれる多くのメモは強く想像をかきたてる。そのひとつに、（明治）二十六年と二十七年には“Maryana comes”を重要な事項として記している。その天心邸「滞在中、丸山阿闍梨は毎朝五時に起きあがると、床にかけた愛染明王の画像の前に

結跏趺坐して天心とともに朝の勤行を怠らなかつた」（岡倉一雄『父岡倉天心』）と書かれる。愛欲の激しさを象徴する愛染明王に「師弟」で祈る、その画像は書簡25の普賢寺旧蔵であったか。また、はつ子の細字の書状や陀羅尼のやりとりなど、多くを語るには別稿を必要とするだろう。

かわりにふたつ引用して終わりたい。中国の玉を愛した天心は「玉壺を裂く」と激しい。その玉にはつ子をなぞらえたと思える「玉人」の詞藻がある。

「玉人ハ何れの処より来ルカ よも人間の種には非らし 花の香も君より出て 月の光も君より映る 鳥の声のやさしき 人の笑の賑ハしきも 天地の榮も君よりや 榮みか苦ミカ 夢に花見る心地もする」（天心『泰西美術史ノート』余白メモは明治二十七、二十八年頃とされる、にかかっている。）同じころ九鬼周造は、周造が七、八才の頃「根岸」（昭和九年七月十七日稿）での母はつ子と天心の思い出から続く、「岡倉覚三氏の思出」（年次不明の随筆）のなかに、「思出のすべてが美しい。明りも美しい。蔭も美しい。誰れも悪いのではない。すべてが詩のように美しい。」と。

天心と貫長の出会いについて

吉 田 千鶴子

初対面

日本美術の保護・復興に情熱を注いだ岡倉天心と仏教復興を目指した丸山貫長は、天心の死去に至るまで親交を保ったが、両者が初めて対面したのは、史料の上からいうと明治二十一年六月に天心が近畿古美術調査のため室生寺を訪れたときだったと推定される。その根拠を記しておきたい。

天心やフェノロサの働きかけによつて、明治二十一年四月、政府は宮内省、内務省、文部省合同による近畿古美術調査の実施を決定し、宮内省図書頭九鬼隆一を取調委員長に、文部省専門学務局長兼東京美術学校長浜尾新・内務省社寺局長丸岡莞爾・同省八木雕・東京美術学校幹事岡倉覚三(天心)・文部宮内両省雇フェノロサを委員に任命した。調査団は五月五日に東京を出発、約四ヶ月にわたつて古社寺の宝物を中心に組織的調査を実施し、一行には新聞記者や写真師、学者その他も加わり、多いときは三十名に達した。この調査を基にして同年九月に宮内省に臨時全国宝物取調局が設置され、古美術保護行政は一步前進する。

調査の進行状況は『官報』や各新聞が逐次報道した。随行員による記録としては今泉雄作の「記事珠」中の調査日記がある。新聞のなかでは京都の『日出新聞』が特に熱心に報道しており、美術に関心の深

い記者金子静枝(錦二、一八五一〜一九〇九)の連載記事は生彩があり、また、資料的価値が高い。

その『日出新聞』の報道中、室生寺調査前後の調査団の動向を報じた記事(六月二十日付)に

宝物取調員の離合集散 九鬼図書頭の一行は六月十三日法隆寺宝什点検を了りて其日郡山に一泊し、翌日生駒山宝山寺に至り、十五日奈良へ帰りて、十六日初瀬に至りたり。此行中岡倉覚三氏は直ちに室生山に赴き、十七日にはフェノロサ氏ビゲロー氏等は信貴山を調査して初瀬に來り会し、十八日両氏とも室生山に赴けり。(下略)

と記されている。室生寺調査には金子静枝が随行して連載記事「美術取調員随行日記」(六月二十四日付)のなかで詳しく報じている。まず、

十六日初瀬に至る。此所より岡倉覚三氏は加納鉄哉を随がへ室生山に赴きしを、山県図書局属と俱に其跡を追ふ。

と記し、十六日に天心が加納鉄哉とともに先発し、山県篤蔵と静枝がその後を追つて室生寺へ向かったことを書き留めている。長谷寺の調査に赴く九鬼らの一行と離れて、天心らは室生寺の調査に出掛けたのだが、こうした分担調査は、調査対象が予想外に多く、能率をあげるために随時行なわれた。加納鉄哉は数年前から奈良に滞在して古社寺の宝物を見学して回り、仏像その他の模造に従事していたので現地の

状況に詳しく、明治十七年の法隆寺夢殿救世観音開扉の際に天心・フェノロサに随行したように、今回も案内役として天心と同行したのであるが、彼は前から貫長を知っていたことも考えられる。右の引用文に続く紀行文は少し長いが、当時の室生寺登山の様子も窺われるので転載する。

初瀬より元伊勢街道を萩原駅に達し、尚半道行きて高井村に腕車を駐め、駕を雇ふて山路に入る。蓋し室生に抵るには上り十八町仏隆寺嶺（里俗餓鬼坂と呼ぶ。往復とも此所に至れば必ず空腹となる故なりと）を踰え、下る事三十余里なりと。險坂峻峰、輿かこ丁苦を叫びヨイトコウン／＼上るに、道路蹠確錐峰を躋わたるが如く、甚はだしき險阻に遭ば駕は四十度を傾く。嶺を越れば下るも亦險。溪に沿ふて行けば深水の道を遮るもの四ヶ所、水上に併列せる石上を涉りて行く其危険想ふべし。下るも、平坦なる道半町と続く事なく、復上り復下りて黄昏漸々室生寺に達せり。室生寺は前には室生川流れて（下流は伊賀の名張川に合すと）十余間の橋を架す。橋上にイずめば河水潺々、巖石に触れて珠を飛し、只見るに岸草涯樹の茂れる間より螢火の幾十となく群来るは又なき興なるに、水声を破りて唳りやうりやう々と啼立るは河鹿なり。耳目の觀想茲に來りて一洗し、清淨無垢の仙境に入るが如く、鶏犬声絶て人語亦聴へず。見廻せば四方山嶽屏立し、所謂播盆はくぼんの底に入りたるものにて、山麓に散在せる農家より灯光の僅に洩るを認め、時恰も上弦にして弦月清く澄ば、雲烟山復たもとに横はり、其景色の絶佳なる殆んど名状すべからず。

こうして山深き室生寺に辿りついた一行を迎えたのが傑僧丸山貫長であつた。出会ひの様子を静枝は記す。

袷衣重ねるも尚冷やかなるに驚き寺に帰れば、任職丸山貫長師（信州長野の産にて、初瀬〔長谷寺〕に学び此寺に転任せりと。本年四十六歳。一号苦行精進）茶を煮て談ずる処、畢しんじつく美術の好話にして、貫長師は仏徒中の美術家なり。画を善し、又工匠の道にも精し。其製する処を見るに言行一致す。蓋し大和國中凡僧多く、否概して愚僧共計りの中に於て、此深山幽谷に此奇僧を得んとはと、一行ともに一驚を喫せり。

「一行ともに一驚を喫せり」というからには天心もこのとき初めて貫長に会い、傑僧にして美術家の貫長に感銘を受けたものと想われる。翌十七日は諸堂および宝物を隈なく調査した。静枝は室生寺の創建、空海による再建、天皇・將軍の庇護、興福寺による支配等々の由緒を記し、往古からの寺領六百十三町八反を明治四年の上知により官に没収されて境内僅か四町を有するのみとなり、著しい衰退をきたしたと、貫長は寺内に真言実行院と称する小堂を建立し、そこに自ら蒐集した仏像・仏具や自作の仏像や画を安置していることなども伝えていた。静枝と山泉はこの日のうちに初瀬に戻ったが、天心と鉄哉はもう一泊して翌十八日に下山した。恐らく貫長とさらに語り合うためだつたらう。そこで貫長の室生寺復興計画についても聴いたに違いない。十八日には夜になって天心が室生寺から帰宿したと今泉雄作の「記事

「珠」に記されているので、一日中室生寺に留まり、そこへ訪れたフェノロサおよびゲロウに会い、貫長に紹介したものと思われる。書簡1の解題に引用されているフェノロサのメモは、天心の貫長評を書きとめたものかも知れない。

書簡1には年記がないが、「拝別以来殆ソト一年」とあることや、室生寺に籠もっている貫長に上京を勧めている様子からみて、最初の対面から約一年後の明治二十二年五月二十八日に初めて出した手紙であろうと思われる。その勧めによつてか、貫長が翌六月から七月にかけて上京し、音羽護国寺に滞在していたとき天心が出したのが書簡2であろう。

貫長ないし仏教と天心周辺の人々

天心が最初に仏教の師と仰いだのは園城寺法明院住職桜井敬徳（一八三四〜八九）である。明治十八年八月、向島の町田久成（一八三八〜九七）邸に滞在中の敬徳のもとをフェノロサ、ビゲロウらとともに訪れ、教えを受けた天心は、九月十五日には敬徳から菩薩十善戒牒を授けられ、次いで同月二十一日にはフェノロサ、ビゲロウも敬徳から梵網菩薩戒を授けられた。敬徳への接近を仲介したのは町田久成と思われる。町田は夙に敬徳に帰依し、明治二十二年十二月には出家して園城寺光浄院の住職となり、僧侶として一生を終えた。天心はこの町田を「多く得難きの気格と鑑識とを抱き、明治創設の百忙中に在つて夙に美術保存に尽瘁」（「明治三十年の美術界」）して上野の博物館を立ち上げた人として深く尊敬していたから、彼が敬徳ないし仏教へ帰

依したのも町田の影響によるところが大きいとみられる。この敬徳の死後、天心は貫長を師と仰いだのである。

敬徳と近い関係にあった人に天心の同僚の今泉雄作（一八五〇〜一九三二）^②がいる。その日記「記事珠」に敬徳に触れた次の三件の記事がある。

一、明治二十一年、近畿地方古美術調査中の六月二十五日、滋賀県揚庁式に招かれて（恐らく天心とともに）出席した日の午後、園城寺法明院阿闍梨（敬徳）を訪ね、昼から待っていた敬徳に結構な精進料理を振舞われたこと。フェノロサとビゲロウも同席したこと。

二、明治二十二年一月四日、御用始めとして東京美術学校へ行き、次いで敬徳を訪問したこと。

三、敬徳死去の記事（「明治廿二年十二月十四日午後六時、小石川久堅町寺門法明院別院ニ於テ寂。一乗菩薩王部大法大阿闍梨清浄金剛敬徳大和尚。円寂後称観自在院」）。

今泉は昌平覺教授附属の職に就いた年に明治維新に遭遇し、動乱のなかで各地に流浪して狭山の勝樂寺に身を寄せ、僧になろうとした。仏教に強い関心を持ち、リヨン滞在中（一八七七〜八三）にはセイロンの僧パンジダ・チレカに二年間梵語を学んでいる。『密教発達志』によつて帝国学士院賞を獲得した大村西崖は、自分の仏教・仏教美術研究の契機となったのは東京美術学校の「考古学」授業で今泉が密教を談ずるのを聴いて研究意欲をかきたてられたことにあるといっているが、当時の美術学校内で今泉は仏教学の第一人者といつてもよい存

在であった。

今泉の日記「記事珠」によると、彼は丸山貫長とも近い関係にあったことが推測される。明治二十六年の七月から十二月にかけて校長天心が清国美術調査に出張した際、校長代理をつとめ、その任務を解かれた十二月二十六日、彼は学校から「學術研究ノ為香川県下へ出張」を命ぜられた。当時、「學術研究」のために香川県へ行く必要性が学校当局にも今泉にもあったとは思われず、実際は臨時全国宝物取調局臨時鑑査掛（明治二十四年任命）としての用務による出張だったのだろう。「記事珠」に香川県下の各寺を順次満遍なく調査したことが記されていることからそう考えられる。まず十二月二十六日に新橋を出発して大阪・法隆寺・王子・達磨寺・当麻寺を経て二十九日蔵王堂、壺坂、土佐町に出、三十一日橘寺、岡寺を経て榛原より室生道に入り、途中仏隆寺で室生寺住職の丸山貫長が讃岐高松へ行っていることを聞いたが、そのまま暗夜山中を歩いて室生寺に到着。年越しをし、翌一月元旦は雪のなか諸堂を拝観。その後桜井を経て大阪に行き、二日汽船で高松に渡った。ここまでは諸寺を拝観はしたものの、調査といえるようなことはしなかった模様である。三日には朝県庁に向いてから早速高松本町二十一番地に寄寓する貫長を訪問し、午後二時頃辞去。四日から十四日まで香川県下の宝物調査を行なって十六日に帰京している。

この記述から、今泉は厳寒のなか室生寺に貫長を訪ねて行き、不在と聞いて高松の寓居まで後を追ひ、会っている。理由は全く不明だが、よほど大事な用事があったように思われる。しかし、今回紹介する書簡にはこの頃のものが含まれておらず、今後今泉の貫長宛書簡ともど

も、新たな発見に期待する以外にない。

貫長が真言実行院道場建設計画実施のために上京中の明治二十六年三月五日に天心が丸山栄真に出した書簡27には「結縁授法を願出候も今日迄にて既二十九人、聴講のもの此他にて十四人」と記されている。天心は周囲に呼びかけて結縁衆九人を確保したのだが、妻のもと子、九鬼隆一・はつ子、今泉雄作、久保田鼎^③（一八五五〜一九四〇）などはそのなかに含まれていたと推測される。今泉については右に述べたとおりだが、久保田は当時帝国博物館主事兼東京美術学校幹事・工場監督囑託、臨時全国宝物取調掛として天心と密接な関係のあった人である。書簡37に「久保田氏」として登場するが、夏中室生寺へ行ったとあるのは、明治二十六年七月二十八日に東京美術学校から帝国博物館依頼嘱古代彫刻模造検分および依頼製作用木材等調査のため奈良・和歌山出張を命ぜられた久保田が室生寺を訪れたことを指す。

なお、近年発見の資料により、大塚保治（一八五五〜一九三二）も結縁衆ないし聴講者だった可能性のある人として掲げておきたい。大塚保治は旧姓を小屋といい、前橋の出身で、明治二十四年に東京帝国大学を卒業、大学院で美学を研究、その頃天心と接して指導を受けた。同二十八年大塚楠緒子と結婚して大塚と改姓、同二十九年から三十三年にかけてドイツ、フランス、イタリアに留学し、帰国後東大教授となった。滝精一と並んで東大美学・美術史講座草創期の双壁であり、文部省美術展覧会開設の功労者の一人としても知られ、大正二年の天心追悼会の発起人にも名を連ねている。前橋の小屋家には天心の小屋保治宛書簡三通が所蔵されており、その一通は東京美術学校の講義を依頼したいという内容で、保治に対する天心の信頼の厚さが窺われる

のであるが、左記の一通は今回紹介する天心書簡27、28に記されているところの貫長の上京について触れており、岡倉家滞在中の貫長との面会を勧める内容であって、天心の貫長支援活動の具体例といえよう。

小屋 (大塚) 保治宛天心書簡 明治二十六年二月二十五日 (消印)
封書

【表】 帝国大学寄宿舍ニ於て 小屋保治殿 親展

【裏】 中根岸四番地 岡倉覚三 (封) 固

拝啓 御出発の期 御定相成候や 陳レハ過日一寸申上候室生山住

職 一兩日中ニ出京 小生宅ニ可被参之由通知有之 御面会相成候

方便宜の次第モ可有之と存候間 御寸暇被為在候ハ、御光来相成度

水曜日ニハ必ス着京の事と存候

二月廿五日

覚三

小屋君 侍史

御知己の方の内ニて真ニ仏道研究ニ熱心ナル御人御座候ハ、御誘
引被下候ても宜敷候

六号、一九九九年) 参照。

(3) 天心と久保田鼎の關係については拙著「岡倉天心と久保田鼎
——久保田家史料を中心に——」(本誌第十号、二〇〇三年)
参照。

(4) 小屋亮一氏藏。「岡倉天心——芸術教育の歩み」(二〇〇七年、
東京芸術大学岡倉天心展実行委員会) 所載。

(1) この『日出新聞』の一連の記事はすでに竹居明男編「明治二十一年近畿地方古美術調査の記録——京都『日出新聞』の記事より——」(一)、(二)『博物館学年報』13、14、一九八一、八二年)において全文の紹介がなされている。

(2) 天心と今泉雄作の關係については拙著「今泉雄作伝」(本誌第